
狂騒する自慰愛

SEI

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

狂騒する自慰愛

【Nコード】

N0418T

【作者名】

SEI

【あらすじ】

きつと善悪を語れる人間は経験した事がないのだろう。みさかいがつかなくなる程の想いというものを。

価値観は千差万別で不変でなどありえはしない。奈月は千川君を愛する事を全てと考え、俺は奈月に尽くす事を全てに考えているだけだ。かといって自分が正しいなんて思ってもいない。ただひたすら彼女の為に……それだけを考えて行動しているだけだ。正しくなれなくて良い。

「わたし人肌って大好きなんだ」

まるで綿毛でも吹くかのような優しい口調で彼女は囁いた。美しく艶やかな長い髪、ぱつちりと見開いた大きな瞳、そして肉感的でもぎたての果実を思わせるような魅惑的な唇。肌は白く透き通っているかの如く、その頬はほんのり桜色に染まっただけで愛らしさに拍車がかかっている。もしも道端ですれ違ったのなら、万人が振り返ってしまうであろう程に美しい。

彼女の名は細川 奈月

ほそかわなつき

奈月の吐息はとろけるほど甘く、周りの景色を桃色へと変えてゆく。

「ほら、こうして触れてると体温が直に伝わってきてまるで一つに繋がってるみたい。ふふっ……干川君の鼓動が肌を通じてわたしに流れ込んでくる」

奈月はベッドに横たわる男の胸に顔を沈めて、至福の表情を見せる。その瞳は魅力的で魅惑的だ。見る者を間違いなく惑わせるような魔力を秘めている。

「ねえ、他人の体温ってどうしてこんなに気持ち良いのかな、干川君もわたしの体温感じてる？」

そう言って奈月は男——干川君の手を取った。そして柔らかな手つきで包み込むとその指先を口の中へと誘い込んだ。卑猥で扇情的な音が部屋に響く。

「あはやん、ねえ……わたしの口のなか暖かい？ わたしの体温……あん、感じてる？ ああん、ねえ、気持ちいい？ わたしはすごい、うん気持ちいいよ」

ふつくと柔らかそうな唇から白い舌を覗かせて、奈月は指先を執拗に嘗め続ける。奈月の口から生み出されたキラキラと光る液体が細い糸を引き、指先へと繋がり伸びてゆく。

「もう、だめ……だめよ……我慢出来ないの」

脳にダイレクトで響くような甘言を吐き、奈月は干川君の瞳をみつめた。その頬は紅潮し、潤んだ瞳は抗う事が出来ない程に艶やかであった。

「ねえ、お願い……もう一回。干川君の欲しいの、干川君を感じて飲み込みたいの、ねえ良いでしょ？」

桃色の吐息をはあはあと荒立たせ、奈月は懇願する。

「もう……だめえ……」

そして……

「――！！」

ぐしゃりと音を立てて指先を食いちぎった。人差し指だ。干川君のそれは奈月の唇に挟まれ、未だに動いているように見えた。

それをむにむにと嘗め回しながら奈月は恍惚の表情を見せる。

「あゝ左手の指、無くなっちゃったか」

干川君の手首を持って、奈月がくすくすと笑う。その手首の先にはもう指は一本、親指しか残されていない。そしてゴムを噛むような音が響きわたる。

「あふん、干川君の血が、肉が、身体の一部がわたしに流れ込んでくるよ。嬉しいな、嬉しいな、嬉しいな、あはっあははははははっ！」

それを口に含んだまま、奈月は高らかに笑った。血が滴る。口端から溢れる大量の赤が、頬に、胸に、太ももにと奈月の身体を赤く染めてゆく。

奈月は享樂に悦りながら顎を動かし続けた。ゴムを噛むような音が、やがてコリコリとした音へと変わり、奈月は口からそれを取り出した。

かつて干川君の指だったそれは、もはや少量の肉を残した骨へと変わっていた。奈月はその端を指で掴んで眼前に持ち上げる。

「干川君を全部食べるからね、一片の欠片も残さずぐんぶっ」

そして舌と前歯を器用に使って、骨から肉片をむしり取り食した。

干川君は絶えず声を発する事なく、眼をそらしたまま虚空をただギツと睨めつけていた。

「んはああ……んん」

やがて真っ白になったそれを愛おしそうに見つめ、存分に愛で終わると奈月はそれを突き出した。

「和正、これいつもの所に保管しといて」

その先に居たのは、もう一人の男。

男はベッドのすぐ脇に立ち、ビデオカメラを携えていた。カメラが映すはもちろん奈月と干川君の両名。男はその二人の様子をただじつとカメラで映し続けていたのだ。

その男——和正は無言でコクンと首を縦に振り、それを受け取った。

「はあん……し・あ・わ・せ……。満たされた」

奈月はそう言う隣と隣のベッドへと沈み込み、すぐに眠入ってしまった。幸せを噛み締めているかのような安らかな寝顔であった。

そんな寝顔を見つめながら和正は心中で呟く、ああ……なんて美しいのだろう。

和正はその美貌に惹き寄せられるようにふらふらと、ビデオカメラ片手に奈月の元へと向う。

「……………」

しばしの間、和正は画面越しにその姿を見続けていた。その瞳には哀愁のようなやるせない感情が伺える。

やがて、和正は小さくふつと溜め息を漏らしビデオカメラのスイッチを落とした。

——きつと善悪を語れる人間は経験した事がないのだろう。みさ

かいがつかなくなる程の想いというものを。

価値観は千種千別で不変でなどありえはしない。奈月は干川君を愛する事を全てと考え、俺は奈月に尽くす事を全てに考えているだけだ。かといって自分が正しいなんて思ってもいない。ただひたすら彼女の為に……それだけを考えて行動しているだけだ。正しくなんなくて良い――

「ねえどうして喋ってくれないの？」

奈月はいつもの定位置に腰を下ろしてそう言った。定位置とは大の字になってベッドに寝倒れた干川君の腹の上だ。奈月はその上に馬乗りになって寂しそうな視線を送っている。

「干川君の声が聞きたいなあ。干川の声を全身の肌で感じたいよう」

奈月の猫なで声が響く。だがそれに答える者は誰もおらず――無論和正も無言でカメラを構えているだけである――奈月は不満気な表情を見せる。

「ねえ悲鳴でも良いの。聞・か・せ・て？ ほらぁ痛いでしょう、なんか喋ってよう」

そう言って干川君の指先を膝で踏みつける。すると割れたソーセージみたいに固まり始めていた手先から血が滲み出してきた。新たに噴き出す鮮やかな赤と、凝り固まったどす黒い色が混じり合う。

「……………ッ！」

干川君の表情が歪む。尋常でない痛みが走っている事だろう。古傷をえぐられるのは新たに傷がつくられるよりも何倍も痛い。だが干川君は依然として声をあげなかった。なぜならば無言でいる事は干川君に出来る唯一の抵抗なのだ。

ちなみに干川君の四肢は何処にも固定されていない。ただベッドに大の字になって寝転んでいるだけだ。だが和正がその四肢を加工して抵抗する力を奪っているので緊縛されているのと同義ではある。つまりところ物理的抵抗は不可能、という事だ。

そんな千川君に出来る抵抗はただ黙る事。今までの経験から千川君は理解っていた。何を言っても、例え罵詈雑言を吐き散らしても奈月を喜ばせるだけなのだ、と。だから黙る。苦し紛れの反抗ではあるが、千川君にはそれしか出来ないものであった。

奈月の顔がさらに不機嫌なものへと変化してゆく。

どうせなら悲鳴でもあげてもっと奈月を喜ばせれば良いものを……和正はカメラを構えながらそんな事を考え小さく舌打ちをした。

「あ”あ” ああゝ！！　なんで！？　なんで言う事聞いてくれないの！？　こんなに、こんなに想っているのに！！」

突然奈月が悲鳴をあげた。眉をひきつらせ、憤怒の感情を爆発させている。そんな顔も美しい、怒った表情は和正もあまり見た事のないものだ。カメラをさらに近づけ奈月を写し続ける。

だが和正のそんな余裕は次の瞬間に吹っ飛ぶ事となるのだった。

奈月が苛立ちまじりに千川君と唇を合わせた。その直後、奈月が「痛たッ」と言って顔をあげた。不信に思い奈月に視線を向けると

……血が、奈月の豊やかな柔らかい唇に傷が付けられていたのだ。

「……………ッ！！」

和正が驚愕して奈月に歩み寄る。ああ！　なんて事だ！　奈月の美しい唇に傷が！

和正は完全に我を失っていた。そして抑え切れない怒りを、無防備で横たわる親友へとぶつけた。

ガツンと右拳を打ち下ろす。和正の怒りは千川君の鼻に命中し……どうやら鼻骨が折れたようだ。千川君の鼻は不自然にひん曲がり鼻血が勢いよく噴き出していた。

「……………。なに、してるの？」

奈月が壊れた人形のような声を絞り上げる。

「なにをおゝしてるのゝ！！」

奈月は同じ言葉を、まるで全く違う言葉のように狂気めいた怒声で吐き出した。

和正がビクンと全身を萎縮させ奈月に振り返る。

ハサミが……振りあげられていた。先端が鋭く尖った金属製のハサミ——ベッド脇に置いてあった物だ。奈月はそれを右手で掴み取り、そして和正に向けて今にも振り下ろそうとしていうところだった。

ああ、ごめん奈月……和正は心中で呟く。

そして和正はハサミが振り下ろされるのを逃げようともし避けようともし、いや目をつぶろうともせず待ち構えた。

奈月に躊躇いはなかった、容赦なく、遠慮なく、奈月はハサミを振り下ろした。

鮮血が舞った。線上の血飛沫が周囲に撒き散らされた。

「ああ……うああ！」

声をあげたのは干川君。恐怖に引き攣った表情で情けない声を発した。

和正の左眼底には金属製の冷たいハサミが突き刺さっている。ビクンビクンと何故か不規則なリズムで血飛沫が噴き出し続けた。
「あんなに邪魔してくれてんのよー！」

怒りの全く治まっていない奈月は、さらに電気スタンドを手にとって振り回す。

「あんた！ ガンッ！ 逆らおうっての！？ ガンッ！ ふざけんな！ ガンッ！ ふざけんな！ ガンッ！ ふざけんなあー！ はあはあ……死ね！ この役立たず！ 出来損ない！ 死ね！ 今すぐ死んじゃえ！」

「やめろ……。やめろおー！！」

干川君が若干震えながらも猛々しく声をあげた。

「いい加減にしろよ、このイカレ女が！！ 和正！？ 生きてんだろうな、おい返事しろ！」

奈月は首だけをグルリンと動かして干川君に視線を戻した。

「やっと声が聞けた。ふふふっ干川君でそんな声も出せるんだね、新しい一面が知れて嬉しいよ。ふふふっ」

奈月の表情は一変して笑顔へと移った。

「嬉しいな、嬉しいな」

そう言って奈月は手に持った電気スタンドを和正の顔面めがけて投げ捨てた。

「このイカレ女が……和正を殺す気かよ」

「ああん、今日はおしゃべりなんだね。良い……良い、良いよ！
もつと聞かせて？ 干川君の声もつと聞きたい」

「くそっ会話にならない程イカレてやがる」

「ふふっ伝わってるよ？ 干川君の声全身で感じていっぱい感じるよ？」

奈月は全身でその喜びを抱きしめるかのように両腕を抱えて震えていた。

「……………ッ」

干川君は思わず言葉を飲み込む。言葉を発する事で奈月を喜ばせるというのが気に入らないのだろう。

「ああゝまたお黙り？ もう…………」

奈月は頬を膨らませる。本当に怒っているのではなく、子供がすねた時に見せるような仕草だ。

「よくわからないけど干川君は和正が殴られるのが嫌なんだ」

「当たり前だ！ 和正は、和正は俺の親友なんだ！」

「なるほどねゝ」

そう言つと嬉しそうな声でふふつと笑った。

「ねえ干川君……こ・こ・舐めて？」

そう言つて奈月は自らの唇を指差した。干川君に噛まれた時に出た傷跡のある位置だ。

「痛くしないでね？ 優しく丁寧にじっくりと、そう、その舌使つてたつぷりと舐めてくれる？ そうしたらもう和正の事殴らないであげるよ」

「くっふざけん…………」

「ちなみに断つたらもつと酷い事しちゃうかもしれないけどね」

クスクスと本当に楽しそうに笑った。
「……わかった。なんでもしてやる」

地べたに頬を擦りつけながら、和正の目に写るは、最愛なる女性と最高の親友とのキスシーン……

大海に一人取り残され漂っているかのような、孤独で虚しい思いが和正を締め付ける。すぐ近くなのに届かない、絶対的な壁の向こう側に存在している。己の存在を希薄に感じる程、惨めな気分であった。眼底にハサミを突き刺されるよりも、電気スタンドで殴られるよりも和正にとっては辛い光景だ。

「あゝ満たされた」

奈月の一日が終わったようだ。この言葉は奈月がいつも寝入る前に使う定型文。奈月はいつものようにそう言って隣のベッドに沈み込んだ。

「……和正、おい和正！ 大丈夫かよ？」

干川君が奈月の様子をおそろおそろ伺いながら尋ねる。

「和正？ おい、しっかりしろよ！」

「……………」

和正はそれに答える事なく静かに立ち上がる。囚人のような重い所作であった。肉体的にも精神的にも堪えているのだろう。

「和正！ お前……病院、早く手当しないと！」

「うるさい、騒ぐな。奈月が起きる」

それは初めての事だった。

三人がこの一室に閉じこもり、異常な生活が始まってもう一週間が経つ。その間、和正は終始無言を保っており、そして和正が言葉を発するのはこれが初めての事だったのだ。

和正はかつての親友に向けてさらに言葉を続ける。

「ばかやろうが、俺の心配なんてしなくて良いんだよ。お前は奈月を喜ばせる事だけ考えてりやそれだけで、それだけで良いんだ」

「お前なに考えてんだよ……なんであんなイカレ女に従ってたんだよ

！　どういつつもりだ！？」

「どういつつもり、だと？」

和正の顔がぴくりと引きつく。いまにも爆発しそうな噴火山を思わせるような表情に変わる。奥歯がすりきれそうな程に、強く強く噛み締めているのだらう。ギリギリと奥歯が擦れる音が聞こえてくる。

「もう口を開くな、お前と話が通じるとは最初っから思っちゃいない。お前は俺が理解出来ないだらうし、俺にはお前が理解出来ねえ。俺とお前はどこまで行っても平行線だ」

和正は床に転がったビデオカメラを拾い上げ、そして部屋を出ようと出入り扉へと向かい、干川君に背を向けた。

干川君がなにか叫んでいたが和正は完全に黙殺し、振り返る事なく歩を進める。もう話す事はない、と言わんばかりの背中であった。出入り扉が開き、そして和正が外に出ると当然のように、再び部屋は密室へと戻されようとしていた。

その扉が閉まる刹那……聞こえるか聞こえないか微妙な、ほんの小さな微かな声が部屋に響いた。

「お前さえ……お前さえ存在なければ……」

怨念のこもっているような冷たい暗い声であった。

やはり、干川君と話すべきではなかった。扉を閉め、それに背中を預けながら和正はそう思った。

心の最奥、もう開く事はないはずであった感情が溢れてきている。嫉妬の感情。全てを奈月の為にと考えて、献身的に見返りも求めずただ奈月の為に……そう決心したはずなのに、結局のところ俺は、自分自身の為に行動しているだけなのかもしれない。だが抑えられない。どうしても考えてしまう。あいつさえ存在しなければ、と。

「このままだと、俺は干川君を殺してしまうかもしれない……」

そんな言葉を呟いて和正はその場を後にした。

とある大学のカフェテラス。屋外に設置された白いテーブルの
一つに水鏡^{みかがみ} 氷華^{ひょうか}は腰を下ろしていた。時刻はまだ午前中、まさに授
業の時間真つ最中なので辺りにはあまり人がおらず、席はポツリポ
ツリと寂しく閑散としている。

氷華はテーブルの上に置かれたアイスコーヒーを意味なくストロ
ーでかき混ぜながら、ふうつと小さく溜め息をついた。

「遅いなあ……今日は本当に来るのかなあ」

氷華は悩んでいた。それは自分ではどうにも出来ない悩み。人が
悩む時というのは大抵どうしようもない事に対してのみだ。解決へ
の糸口があれば後はそれに向けて努力すれば良い。だがどうすれば
解決へと導けるのか、それがわからなければどうしようもない。だ
から氷華は悩んでいる。

どうすれば彼女の為に手助けが出来るのか、氷華にはわからなか
った。それは彼女の感情を共感出来ないのが原因の一つなのかもし
れない。彼女の力になってあげたい。だけど彼女の事が理解出来な
い。そんな二重背反もあつて氷華は悩んでいるのだ。

「氷華ちゃん？」

顔を上げるとそこには氷華の待ち人、杉山 典子がいつの間にか
現れていた。そう、彼女こそが氷華が頭を悩ませ助力してあげたい
と願う相手なのであった。

「典子！」

氷華はパツと立ち上がり弾んだ声をあげて名前を呼ぶ。

「久しぶり、ごめんね、今まで連絡しないで……ってええ？」

氷華は申し訳なさそうに謝る典子の言葉を遮り、両腕でぎゅつと
抱きしめた。二人の身長は同じくらいなので正面から抱き合うと氷
華の鼻先に柔らかな典子の髪がサラリと触れた。

「もう！ このばか、うちがどれだけ心配したと思つとるん？ 毎

日心配で不安で……寂しかったんだからねっ」

「うん……ごめんね、なかなか心の整理がつかなくて一人でじつくり考えようと思ってさ、ごめんね、ずっと連絡しないで……って氷華ちゃん、ちよつと力強すぎ、いつ痛いよ。ぐうっ苦しい」

氷華は典子の身体にまわした両腕をさらに力を込めて抱きつき、ぐいぐいと締め付ける。

「うちを心配させた罰なんだから、典子、ちゃんと反省しとるん？」

「ごめんなさい言うまで離さへんからな」

「ふえ、私謝ろうしてたよね、いまからちゃんと謝ろうと……」

「うつさい！ ほら謝りい、ごめんなさいってちゃんと言いつ！」

「ああんごめんなさい！ 氷華ちゃんに心配かけてどうもすいませんでした」

「よし、許す」

そう言つて氷華は両腕のしがらみを解いた。

「もうっ氷華ちゃんたら……」

悪態をつきながらも典子は嬉しそうだった。

再会を喜んでから二人は席に着いた。典子もアイスコーヒーを頼み、二人は向かい合つて色んな話を話した。これまでの空白を埋めるかのように会話を弾ませた。

「それで、もうふっ切れたん？」

そして和やかな談笑が一段落し、氷華は単刀直入にそう尋ねた。

氷華にはオブラートに尋ねたり、まわりくどい言い回しが苦手好きでもなかった。だからこんな直球でしか聞く事ができない。

「う、うん、もう大丈夫だよ。いつまでもうじうじなんてしてられないからね」

典子は傍目にも大丈夫ではないのがわかる様な声で応えた。無論それくらいは氷華にもわかった。空元気なだけなのだ。

典子はここ二週間程、学校を休んでいた。身体の調子が悪かったわけではない。学校側からしてみればずる休みという事だ。氷華は心配して何度も電話をかけていたが、ほとんど連絡のとれない日々が永らく続いたのだ。それはなぜか、氷華がそれを知ったのは最近の事だった。

その原因というのは、いわゆる恋愛事情というやつだ。他人からしてみればなんともばからしい事。実際氷華もそう思った。だが本人にとってはなにより重要な事だったのだらう。

典子とその相手はまだ恋人同士ではなかった。その一歩手前という関係であつた。その相手が突然にして姿を消したとの事だった。典子に何も言わず、本当にずっと消えるように姿を消したらしい。家を尋ねても、彼の友人に尋ねても何も手がかりはなく、もう一ヶ月余りが経つ。

氷華はその典子の相手に会つた事が何度かある。なんともちやらちやらとした風貌の、あまり信用出来ない男だったと認識している。だからこの話を聞いた時、「ああ、きつと他の女でも出来たんだな」とすんなりそう思ってしまった。おそらく典子もわかつてしまったのだらう。自分が捨てられてしまった事に。

そして典子が家に引きこもって今日まで二週間が経つたという事だ。だが今日で終わりだ。氷華は決心する。うちが典子を元気づけてやろう、と。

「よし！ んじゃ今日は何処か遊び行こ！ めいっぱい楽しんでば」と遊ば、典子どこ行きたい？ なんかしたい事ないん？」

氷華は立ち上がり典子の手を取った。

「え、でつでも学校は？ 午後から心理学の授業あるでしょ？」

「今まで散々ずる休みしてたくせに何言うてんの、良いじゃん、久しぶりに会えたんやから今日くらい付き合ってくれたて」

「うっ……確かにそうだけど、でも……」

典子は躊躇いがちに返事を返す。典子は基本的に気真面目な性格

をしているのだ。今回の件もその性格が拍車をかけたのかもしれない。氷華は、そんな典子を強引に誘う。

「ほくらっ！ 行こっ！ さっさと用意して」

強く手を引くと典子は諦めたように顔を緩める。決して嫌がっているという訳ではなく、どこか嬉しそうな表情だ。

「んゝわかったよ。そうだね今更な感じするよね」

「そうこなくっちゃ」

氷華は満面の笑顔を返しその手を離れた。

「それじゃ二人してさぼりという事でっ」

そして二人は用の無くなった校舎を後にした。

歓楽街へと来ていた。平日の昼間だというのに氷華達と同じくらの年代の若者が溢れていた。よく見ると大学のキャンパスで見かけた事のあるような人も居る。ここは氷華達が通う大学生達にとって主流な遊び場なのだ。

「でゝ典子はなんかしたい事ある？」

氷華は語尾を不自然な程にアクセントを上げ典子に尋ねる。これは氷華がとても機嫌が良いという証拠の癖である。

「うゝん、そうだなあ……」

典子は一差し指を顎にあて首を傾げた。非常に可愛らしい仕草であった。氷華はふふっ、と笑みを漏らす。

「典子は可愛いからナンパでもされるんじゃない？ ちょっとかっこいい男でも探してアピってみよか？」

「??あう……」

「冗談まじりの言葉であった。氷華は何気なく言ったただけであったが典子は顔を一变させてしまったのだった。男関係の話題はまだタブーのようだ。氷華はそれに気づき強引に話題を変換させた。

「あ、ええっと……そうだ！ クレープでも食べよう！ うちが奢るから一緒に食べ行こ？」

「クレープ？ う、うんそうだね。行こう、私食べたいよ、うん」
典子は陰鬱な表情を必死に隠そうと努力しているのだろう。どこかぎこちない返事をして、ぎこちない笑顔を返す。

「はは、それじゃ行こか」

対する氷華も元気をなくしていた。ああ失敗しちゃったな、と後悔しているのであつた。

それから二人はぶらぶらと歓楽街を歩いたり、買い物をしたりと二人きりの時間を過ごした。お互いに男の話を話題にはあげなかった。今日はただ純粹に、嫌な事を忘れて楽しもう、そう思っていたのだろう。

だが氷華が思っている以上に典子は苦しんでいたようだ。それを氷華は気付かされる事となる。

それから二人してカラオケ屋にやって来た。典子は歌う事が大好きだと知っていたので、きつと典子の気も少しは良くなるだろう。そう思っていた。典子も喜んでいたので、何も問題などないかと思っていた。

しかし……

曲を入れて典子がマイクを持って歌い始める。そして気分よく歌っていたと思つたのに、典子は急に歌うのを辞め、泣き崩れてしまった。

本当に突然だつた。ポロポロと大粒の涙を流し始めたのだ。

訳がわからなかった。突然の事態に動転し氷華はこう言う事しかできなかった。

「どつどうしたの！？」

典子はとても喋れる状態ではなく、ただ泣き続けるだけであつた。そんな典子を動揺しながらもそつと抱きしめた。

「どうしたん、典子？ 落ち着いて、ほらゆっくり呼吸して、すー

はあ……てな」

典子の涙は止まる事を知らず、流れ続け、やがて典子はぽつりぽつりと途切れながらの言葉を絞り出し始めた。

「ひん、ぐすん、どうして……どうして、私は勇気が出せなかったんだろ、臆病でもし断られたらとか考えて……会えなくなるなんて、ひつく、事に比べたらなんでもない事だったのに、そんな事も考えられなかったなんて、なんてばかだったんだろ……なんで伝えられなかったんだろ……」

典子の胸に刻まれた後悔の念が、一度それ^{ひとたび}を口にすると留まる事なく溢れてきたようだ。

歌が流れる。

DREAMS COME TRUE LOVE LOVE LOVE
『ねえどうして、すごくすごく好きな事、ただ伝えたいだけなのに、ルルルル、うまく言えないんだろ。ねえせめて夢で会いたいと願う夜に限って一度も、ルルルル、出てきてはくれないね。二人、出会った日が少しづつ思い出になっても……愛してる、愛してる……LOVE LOVE 愛を叫ぼう、LOVE LOVE 愛を呼ぼう』

典子は氷華の腕の中で悲鳴のような声を振り絞る。

「氷華ちゃん……私だめだよ……どうしても干川君の事忘れられない、伝えたいの、私の気持ちを……、もう嫌われてたって良い。伝えなきゃ終わる事も出来ないの、会いたい、会いたい、会いたい！

干川君に、 会いたいよー氷華ちゃんっ」

「典子……」

今まで氷華には、傷ついた典子の為に何をすれば良いのかわからなかった。大好きな友達の為にどうすれば力になれるのかわからず、だからずっと悩み続けてきた。ただ時間の経過を待つしかないのか、と己の無力さに嘆きもした。だが会わせるといっただけなら、それは氷華にも手助けが出来る事である。再び会ってその後うまくいくとは思っていなかった。だからそんな事は無意味だと思っていたが、

典子がただ会って伝えたい、そしてきちんと終わらせたい、とそれだけを思っているのであれば意味はある。なによりこんなにも泣きながら再会を願う典子の望みを叶えてあげたい、そう思った。

「典子、うちに任せてよ。干川君とやらを見つけてきてあげるから」
氷華は典子の頭を優しく撫でながら穏やかな口調でそう言った。
「知ってるでしょ？　うちに出来ない事なんてほとんどないんだから、探し人なんてそんなの例え指名手配犯だって一週間で見つけ出せるっての、だから安心しいよ」

そう言って典子をぎゅっと抱きしめた。その腕の中で典子は躊躇いがちに声を絞り出す。

「でも……でも……そんなの、大丈夫なの？」

「典子はもっとうちの事頼ってくれて良いんだよ？　遠慮なんていらんから、うちに任せて安心して待っててよ」

「本当に……本当に干川君にまた会えるの？」

「うん、約束するよ」

氷華は優しく微笑みかける。すると典子は「ありがとう、ありがとう」と涙を流しながら何度も言い、そして最後に「ごめんね」と漏らした。

「典子はうちの大事な親友だからね」

そう言って氷華は頬を伝う涙を拭ってあげた。

氷華は家に帰って、さっそく干川君の搜索を始めた。かといって私立探偵のように自らの足で探す訳ではない。ただ電話を一本、実家へとかけただけである。

氷華の実家はいわゆる極道の家系であった。その一人娘である氷華が頼めば、人間一人を探すくらいの事は難なく可能だ。

氷華は小さい頃の事を思い出していた。氷華が典子と出会った、中学生の頃の事を。

人の噂はどこからでも駆け巡るもので、氷華の家系の事はいつの

間にか皆が知っている共通の常識になっていた。いじめ……そう言うていいだろう。水鏡氷華は中学生の頃いじめにあっていた。

疎まれ、避けられ、忌み嫌われる、当時十四歳であった氷華には誰一人味方はおらず、孤独を強要された学生生活を氷華は送っていた。取り巻く全ての人達が氷華を拒絶していた。友達なんか一人もいなかった。教師も氷華の事をまるで存在しないかのように扱われ、氷華はいつも一人きりであった。

氷華は自分の弱みを見せなくなかった。可哀想だなんて思われたくない。くだらない馴れ合いなんかするよりは一人でいる方がマシだ、と自分からも周囲の人達を拒絶するようになっていた。

単なる強がりだった。本当は辛かった、助けて欲しかった。けど自分が拒絶されるという辛さから目を逸らす為に、自分が望んで一人でいるんだ、と強がる事しか氷華のは出来なかったのだ。

そんな頃出会ったのが典子だった。不思議な子だった。何が嬉しいのかつきまとわれ、執拗に話しかけてきたのだ。そして『氷華ちゃん』などとまるで普通の友達であるかのように氷華を呼ぶのだ。

当初は典子の事が苛ついて仕方なかった。氷華は典子を拒絶し、無視し続けた。そして全身から近寄りがたいオーラを発し典子を邪険に扱い続けた。

しかしそれでも典子は氷華につきまとい続けた。そしてとある拍子に、氷華は典子にブチ切れたのだった。

「いい加減しいや！　なんでうちにつきまとうん？　うざたいつちゆうのわからん？　もううちに近づかんで！」

そして典子の頬をおもいきり叩いてやった。絶対的な拒絶、これでこれからは典子も近づかないようになるだろう。そう思っていたが典子の口から出た言葉は「いやだ」の一言だった。

あまりのも意外な言葉に氷華は啞然としてしまった。「はあ？」
と思わず言葉が漏れた。

「気付いてる？　氷華ちゃん、時々すごい寂しそうな目をするの。私わかるの、氷華ちゃん本当は普通の優しい女の子でただ強がって

いるだけなんだって。ねえ私と友達になってよ、辛い時助け合ったり、楽しい時一緒に笑ったり、そんな普通の友達になってよ」

叩かれた頬を痛むだろうに、そんな素振りも見せず典子は強い意志を込めた瞳でそう言った。

……なんて甘々な考え方する子なのだろう、頭の中がお菓子でも出来ているのだろうか。なんでこうまで邪険に扱われておいて自分の事をこんなに受け入れようとしてくれるのか、世の中の人間全てが善人に見えているのかもしれない。きっとこんな子が将来詐欺とか悪い男とかに騙されたりするんだろうな、本当にばかな子だ、本当にばかな……

「……えっ？」

ぼろりと涙が流れた。

頭はねじくれた考えをしているというのに、それに反して涙が止まらない。一瞬ゴミでも目蓋に入ったのかと本気で思ったが、そうではなかった。止めどなく涙が溢れ、一旦溢れた涙は止まらず、氷華はとうとう号泣してしまったのだった。そんな氷華を典子は優しく抱きしめてくれた。あんなに暖かい気持ちになれたのは生まれて初めてだった。

「……………」

氷華は瞳を開いて思考を現在へと戻らせる。

そう、あの時からずっと典子は誰よりも大事な唯一無二の大親友。典子の為ならなんでもしてあげる。出来ない事でもしてみせる。

「典子はうちの大事な友達だからね」

今日典子に向けて言った言葉を、今度は一人呟いて氷華は眠りについた。

翌日、平日だったので氷華は普段通り学校へと向かった。今日は朝からの授業である。いつも朝の授業はさぼったり遅刻したりが常の氷華であるが、今日は定刻通りに家を出た。典子は今日も学校に来るかもしれない、そう思ったからだ。氷華よりも何倍も真面目な典子は普段通りであるならば必ず朝から授業に出席する。昨日の事があるからまた休むかもしれないが、来るかもしれない。そう思っ
て今日は早くから家を出たのだった。

大学は氷華の家から電車とバスを乗り継ぎ一時間程の距離の場所にある。朝の通学としてはなかなか辛い距離と時間だ。

そして、やつの事でもうすぐ大学に着く、という所で氷華の携帯電話が鳴った。ディスプレイに表示されるは牧の文字。昨日干川君の搜索を頼んだ実家の組員だ。ちなみに氷華の許嫁筆頭候補でもある。（氷華は認めてはいないが）

「もしもし」と常套句で電話に応える。

—— あっおはようございます。氷華さん今どちらですか？

慌てたような声だった。そして前置きもなく投げかけられる問いかけ。なんだろう、と少し疑問に思う。

「今あ？ もうすぐ学校とこやけど、どうした？ 干川君見つかったんか」

—— それはちょうど良かった。ではすぐ迎えに行きますんで校門の辺りで待って下さい、では。

プチッという電子音がして電話が切れた。

「はあ？ 今からで、まさかあのえぐい車でかけつける気？ って
おい。……あちゃ切れてる」

すでに通話相手のいなくなった電話に氷華は声を投げかける。
「なんだってのよ……？」

洪水のように学生達が流れる校門の前で、一人立ち止まって待ち
続けていると十分程して牧が現れた。

その姿を見て氷華はあちゃあ……と頭を抱えた。

まず牧の見た目、単純なルックスとしては悪くない顔ではある。年は三十半ばで少しダンディな感じだし背も百八十近くある。だがその服装は……まあそのヤクザ屋さんルックですよ。黒スーツにワ二革の靴。やたらと黄金色に光る時計やら……オーラが一般の人とはかけ離れている訳で……。そして駆けつけた車が黒塗りのセンチュリー。

さらに牧は氷華に歩み寄り「お待たせしました」などと大きな声で挨拶するものだから恥ずかしくて仕方がなかった。

典子の為だ……我慢、我慢、と自分に言い聞かせる。

「さあ、車乗って下さい」

氷華は赤面した顔を俯かせて無言でこそそと車に乗り込んだ。

「それで、どないしたん？　なんかわかったんか？」

不満や苦言、言いたい事は沢山あったが、それを飲み込み氷華はストレートに本題について尋ねた。

「ええ、その前に聞きたいんですけど、氷華さんと干川という男といたいという関係なんですか？」

「はあ？　関係？　なんでそんな事聞くの？」

「いいから教えて下さい」

牧はピシリとそう言い放ち氷華に答えを促す。良い年して嫉妬でもしているのだろうか。

「関係って言われても……うちとしてはあんま関係ない男なんやけど実は……」

そして氷華は干川君を探す事になった契機を説明した。

氷華の説明を聞き牧は「なるほど……」と言っていたが、なぜか腑に落ちない表情をしていた。

「でさあ、今どこに向かってるん？　まさか干川君もう見つけたとか？」

「いえ、それはまだ……ちょっと説明し辛いんですが……とにかく

もうすぐその男の家に着きますんで一緒に行きましょう」

「まさか普通に家に居たとかそんなオチ？　だったら悪い事したねえ」

「……………」

氷華の言葉に応える事なく牧はただ苦い表情で運転を続けた。なんとなく不穏な空気を氷華は感じていた。なんだか重々しい空気に氷華自身も口を閉じ、車が目的地に到着するのを静かに待ち続けた。

牧が車を路肩に駐車させた。細い道路だったので交通標識には駐車禁止の文字があったが、牧はどこ吹く風といった様子だ。これまでこの車で取り締まれた事などないのだろう。当たり前といえば当たり前かもしれない。

「ここです」

その視線の先には、かなり高級そうなマンションがそびえ立っていた。典子から一人暮らしをしていると聞いていたので少し予想外の住まいであった。

「では行きましょう」

牧に促され氷華はその後を付いて行つた。

干川君の部屋の前まで来た。扉の前で牧は立ち止まり、氷華に向かって妙な言葉を投げかけた。

「氷華さん、これから中に入りますけど決して大きな声は出さないで下さいね。人が来ると色々……………面倒な事になると思いますんで」

「ああ、わかった……………」

牧の言葉は真剣さそのもので氷華は疑問には思ったが素直に頷いておいた。

「では、入りましょう」

牧が力チャリと扉を開いた。

良い部屋住んでんなあ、足を踏み入れて最初に、氷華はそう思った。

学生の一人暮らしにしては勿体ない程の広さの部屋だった。玄関から見えるキッチン、三、四人が並んで調理が出来そうな程広く、収納棚にはあり余る程のスペースが設置されている。なぜか業務用のような巨大な冷蔵庫まである。

その奥にはパーティができそうな程、開かれた空間。中央に木製の大きなテーブルが置かれ、壁際にはやたらと高そうな電化製品が細やかに設置されていた。

奥には他の部屋がいくつかあるようだが、一見して特に変わった所もないように思えた。

「氷華さん、こっこの部屋です」

振り向くと牧がその部屋の一つに手をかけて氷華にむかって手招きしていた。その時には既に嫌な予感確信めいたものになっていた。いったい部屋の中には何があるというのか。

そして牧が扉を開いた。

中は寝室のようだった。干川君は几帳面な性格なのだろうか。部屋の中は年頃の男子の部屋にしては細かに整頓されている。というよりも生活するのに不自由なのではないかと思う程に家具やら物が排除された、生活感のない空間だった。

「……あれ？」

ベッドの上に視線を移す。そこにはマネキンが置かれていた。ひらひらとしたピンク色の衣装を着せられ飾られたマネキンがベッドに腰を下ろしていたのだった。そのマネキンは腕と足の部品が取り外されていて、所在無さにベッドの外枠に立て掛けられている。

なんでこんな物が、と疑念に思い氷は一步步寄り、そのマネキンを注視した。そしてその正体を知った氷華の背筋は一瞬にして凍結し、小さく「ひっ！」と悲鳴をあげた。

それはマネキンなどではなかった。死んだ女の屍体であったのだ。
った。

「まっ牧！ なっなんなのこれ！？ どういう事！？」

「そんな事私に聞かれても……むしろ私が聞きたいくらいですよ。
今朝ここに押し入ったら時に発見したばかりなんですから」

氷華はもう一度、その屍体に視線を移した。両手足が切断されている。なんともえぐい光景だ。だが死因は四肢を切断された事が起因ではなさそうだ。その肌と表情を見ればわかる。おそらく餓死だ。肌はカサカサに乾きはて、その顔は苦しそうに萎れたままで硬直している。

「おそらくその男に監禁されていたんでしょ？」

牧がそう言った。「まっまさか……」と言って笑おうとしたが無理だった。顔の筋肉が痙攣をおこしたかのようにひきつく。

「それにしてもなんて変態な野郎だ……手足をぶつちぎって監禁するなんて人間のする所行とは思えん」

氷華の頭は混乱していて、思考がきちんと追いついてこなかった。ぐるぐると気持ちの悪い物が脳内を延々泳ぎ回っている。

干川君がこの少女の両手足を切断して監禁していた？ あまりにも非現実的だけれども、なにより証拠が目の前にある。しかし、それならば干川君は今どこにいいのか。そうまでして監禁した少女を放つたらかしに、どこに行ったというのか？

全身を雷で打たれたかのような衝撃が全身を襲った。

瞬間、氷華は携帯電話を取り出し手早くコールさせる。相手はもちろん典子だ。もし典子の元に干川君から連絡が来ていたら……典子は喜んで会いにくだろう。疑う事もなくうきうきと。それはありえない事ではないように思え、今まさに危機が迫っているかのよう
うに氷華は感じていた。

電話のコール音が鳴る。一、二、三……お願い、典子、出て……
ッ！

——はい、もしもし。

いつもと変わらぬ典子の声だった。ほっと安心して脱力する。

「典子！ 典子今どこいんの？」

——？ 学校だよ、いつまでも休んでいられないからね。

「そうか、良かったあ……」

——どうしたの？ なんか慌ててるようだけど。

「え？ ええつと、それは……」

氷華にはどう応えてあげれば良いのかわからなかった。干川君の事を話すべきなのか、話さない方が良いのか。どちらの方が典子の為になるのか氷華にはわからなかった。

二、三秒ほど不自然な沈黙をしてしまう。

——もしかして干川君の事？

「ええ？ い、いや、その事とは関係ない関係ない。ただ学校来てるのかな？ と思ったただだから」

——心配してくれたの？ ありがとうね。

「あつそうだ、それから干川君についてはもう少し時間かかる思うよ」

——そっか……ごめんね、氷華ちゃん。

典子の声を聞き氷華は決意を固めた。何が典子の為になるかはわからない、だけど。

「典子……典子はうちにとっての大事な、一等大事な友達だから……」

——えっ？ う、うん。急にどうしたの？

「だから……典子の為なら、うちはなんだつてしてあげるよ」

——どうしたの、氷華ちゃん？ なんか変だよ？

「なんでもない、それよりもう少ししたら学校行くから、その時はノートとレジエメ見せてな。それじゃ切るよ」

そして氷華は牧に三つの事を伝えた。一つ目は、なんとしても干川君を見つげ出す事。二つ目に、見つけたら警察には知らせずに氷華の元へ届ける事、そして典子に護衛をつける事。

典子の為に……その想いは純粹なものだった。だが、その思いがやがて歪んでゆく事になろうとは、その時の氷華には知る由もなかった。

「あゝ満たされた」

奈月の言葉によつて今日も一日が終わる。この一室において一日の始まりと終わりを告げるのは太陽ではなく、奈月の役目となつていた。奈月が目覚めることにより千川君と和正の一日が始まり、奈月が寝入る事により一日が終わる。そうこの一室は完全なる奈月の為だけに存在する特殊空間なのだった。

奈月が寝静まるのを安らかな表情で見届け、和正は千川君の腕をとった。そして用意してきた点滴用の小さな袋にチューブを差し込み、先端に光る注射針を千川君の腕に沈み込ませた。千川君の生命を持続させる事も、和正の仕事であつた。

だが千川君の様子を見るに、それも長くは続かなそうだ。

「ふんっ死にかけだな……」

点滴を送りながらぼつり呟く。千川君はドブネズミが腐つたような土気色の顔をしていてその瞳には生気を感じる事が出来ない。

「なあ、死んじまう前に聞いておきたい事がある、お前は奈月の両足をどこにやつたんだ？」

和正は死人のように横たわる親友に冷淡とした声で尋ねた。

「奈月の、両足……？」

「ああ、そうだよ、無惨にもお前がぶつた切つた奈月の足を、お前はどこにやつたんだ？」

改めて口にする和正の心は波打った。ざわざわと感情の波が荒れていく。その波を必死で抑えようと和正は胸に手をあてた。

「ああ、奈月の足か。それなら……」

千川君はそんな和正の疑問をあっけなく教えてくれた。悪びれもせずしれっと、まるで当然の事であるかのように教えてくれた。

「やつぱりか……じゃあ奈月が今している事はお前の真似をしているって事か」

その答えは和正がうつすらと予想してあったものであった。奈月の両足、奈月が死んだ時には一緒に墓標に入れてあげようと和正は考えていたが、それは不可能なようだった。

干川君は言った。奈月の足を切断した後、それを奈月の目の前で食したらしい。食べ終わるのに三日かかった、などと無駄口を叩く干川君に和正は思わず「なぜそんな事を……」と尋ねた。

だが返ってきた言葉に和正は後悔した。「だって勿体ないだろ？」疑問符を浮かべて干川君はそう言ったのだ。だめだ、やっぱり話にならない。

「くそっ！ お前のせいで奈月は！ 奈月は！」

和正は頭を抱えて強く掻きむしった。爪が割れる程に、ガシガシ、ガシガシ、と何度も何度も強く掻きむしり続けた。和正の額につつと血が垂れる。

「こんな事なら、早いところ奈月の腕も奪っておけばよかった……」

干川君が誰にいうでもなくポツリと呟いた。

「なん……だと？」

和正の動きがピタリと止まった。そしてわなわなと震え始める。

憤怒の感情が燃え上がり和正が声を荒げる。

「今……なんて言った……？ なんて言いやがった！？」

和正は干川君の襟元に掴み掛かって罵詈雑言を吐きちらす。だが干川君はそれに反応する事なく、そして力なく寝ぼけたかのような口調で意味の分からない事をぼやくのであった。

「ああ、優花……優花に会いたい。俺がいなきゃ何も出来ないのに。

ああ、優花、早く家に帰らなきゃならないのに……」

「なんだ、なんの話だ！？」

「ああ、優花……早く会いたい」

「急になに言つてやがる！？」

和正が問いたですと、干川君はゆっくりと怠惰に語りだした。

「優花は奈月の代わりだ、奈月はお前が連れ去っちゃったからその代わりに俺の物にした女だ。ああ、早く帰らなきゃならないのに」

和正の背筋がぞつと震え上がった。奈月の代わり？ まさか……。

「まさか……他の女にも同じ事をしたのか！」

「今度は両手も削いだから、もう逃げ出す事はない。余計な邪魔を呼ぶ事も出来ない」

「きつ貴様あゝ！　なんで、なんでだ！　なんでそんな事が出来る！？　なんでそんな酷い事を平気な面つらして出来る！？　お前はなにを考えているんだ！」

体中の血液が全て頭にのぼってきたかのようにだった。蒸気が発散させるほど熱を頭に感じながら、和正は干川君の襟元を締め付け引っぱりあげた。干川君の身体がくの字になって起きあがる。

「愛しているからに決まっているだろ」

「なん……だと？　愛している？」

「愛しているから全てを委ねて欲しいと思う、捧げて欲しいと思う。誰にも盗られたくない。自分一人だけの物にして全てを独占したい。そう思う事のなにか可笑しい？」

「……くっ狂ってやがる。こんな奴だなんて知らずに俺はお前の事を親友だなんて思っていたなんて」

和正は襟元から手を離し一歩後ずさりした。やけどしそうな程熱をもった頭が今度は逆にすつと冷たくなってしまった。

「正気じゃない……完全にイカレてる」

「俺がイカレてる？　なにを言うんだ、俺は普通だ、イカレてなんかない！　ただ愛しただけだ、お前の方がよっぽど異常じゃないか！」

干川君が急に声を荒げた。その瞳は見開かれ干川君の怒りが伺える。先ほどまでは死んだ魚のような目をしていたというのに。

「なん……だと……？　俺が異常だった？」

「そうだ、お前はいつたいなにをしているんだ？　お前も奈月を愛しているんだろ？　その為にお前はなにをしている？　なんだこれは？　俺を閉じ込めて奈月に好き放題やらせてお前はいつたいなにをしているんだ？　おまけに俺の両足まで奪いやがって、なんだ？」

腹いせのつもりか、惚れた女を盗られた復讐のつもりか？ トチ狂うのもいい加減にしろ、筋違いにも程があるってもんだろ」

「だっ黙れ、この狂人がッ！」

「もう一度聞く、お前はなにをしているんだ？ 奈月の事が好きなんだろ？ その為にお前はなにをしているんだ？」

「お、俺は奈月の為に…… 奈月の望む事を叶えてやろうと……」

「それだけか？ 奈月に愛されたい、そうは思わないのか？ その努力を一切せずにお前はなにをしているんだ？ こんな事を続けてなんの意味がある」

「黙れって言ってるだろ！ この野郎…… イカしてるくせに常識人ぶった事言いやがって……！」

和正は干川君に飛びかかりその剥き出しのままの首に襲いかかった。両手に力を込める。憎しみをのせた両の手がギシギシとその首に食い込んでいく。

「お前さえ…… お前さえ存在なければッ！ 俺と奈月はずっと幸せでいられたんだッ！ お前さえ…… お前さえ現れなければッ！ 俺たちはずっと、ずっと……！」

もぞり、と毛布が動く音がした。その音に気づき和正はピクリと動きを止め、指先にかかる力をゆっくりと抜いた。そして首から手を離すと干川君が苦しそうに咳き込んだ。ゴホンゴホンと咳き込みながらも干川君が言葉を吐き出す。

「ごほっごっごほっ…… はあはあ……。俺はお前の事を今でも親友だと思ってるんだがな」

「……………」

部屋の太陽、奈月が目を覚まし今日もまた一日が始まるのであった。

辛い……まるで拷問のようだ。頭が朦朧としてきた。少しでも油断すると目蓋が閉じて、二度と開かなくなりそうだ。なんとか意識を保とうと左手で腕の皮膚をぎゅっとつねってみる。痛い、確かに痛みが脳みそを覚醒させるには至らない。

なぜこうも大学の講義というものはこうも退屈なのだろうか。氷華は左方に座る典子へと視線を移した。典子は背筋をピシッと伸ばして、どんな一言も逃さない、と言った真剣な眼差しでダラダラと講釈をたれ続けている教授に集中している。

「典子……あとは任せた」

睡魔の誘惑に負けた氷華は、机に覆いかぶさるように上体を預け、両腕を枕に瞳を閉じた。

「ちよちよつと、氷華ちゃん？」

典子が呼ぶ声がして何度か肩を揺すられたが、氷華はそれに反応する事なく眠り続けた。

昼休み、構内は教室から流れ出てきた学生達が溢れ賑わっていた。ワイワイガヤガヤとそれぞれ気の会う友人達と昼食を供にしている。氷華と典子もその例外ではない。キャンパスの東部に位置する円形芝生、手入れの行き届いた芝生にぺたんと座り込んで、二人は隣り合って食事をしていた。

「もう、氷華ちゃんいきなり寝ちゃうんだもん、びっくりしたよ」

手作りのお弁当箱をパカッと開きながら、典子が愚痴るように言った。典子のお弁当はいつもと同じく可愛らしい出来映えだった。掌に乗るくらい小さな二段箱に、色とりどり鮮やかな配色の野菜や煮物が、これまた綺麗に仕分けられている。典子の昼食はいつも持参してきたお弁当だ。毎朝自分で作って持ってきているらしい。氷華が初めてそれを聞いた時は目玉が飛び出す程にびっくりしたものだ。

「ごめん、ごめん。だってさゝあんなだったらと話されたら眠くな

って当然じゃん。とてもじゃないけど真面目に聞いてられないよ」

氷華はサンドウィッチの包装を取りながら言い訳する。ちなみに氷華の昼食はいつもコンビニの総菜パンや今日のようなサンドウィッチだ。とてもじゃないが典子のように毎日お弁当の持参などできやしない。そもそも氷華にはまともな料理をした経験もない。

「うーん、意外と真面目に聞いてたら面白い事もあるよ？ あの先生の授業はわりかし面白い方だと思うし」

「ええーマジで言ってるん？ あんな授業のなにが面白いのよ」

「なについて言われると、そうだなあ……。今日の授業だと嘘の見抜き方っていうの面白かったな」

「嘘の見抜き方？ そんなのやってたっけ？」

「氷華ちゃんは寝てたんだから知ってる訳ないでしょ」

典子に責められるような目で見つめられ氷華は「ごめんなさい」

と俯いた。そして「あとでノート見せてな」と眼前で手を合わせる。

典子は少し渋るような仕草を見せたが、やがて了承してくれた。

「それで、嘘の見抜き方って？」 氷華が尋ねる。

「ああ、うん、えつとねえ……」

典子がお弁当を脇に置いてバッグの中をゴソゴソとあさり始めた。氷華に説明する為にノートを取り出すつもりだろう。そんなに興味をもって尋ねた訳でなくちよつとした興味本位でしかなかったので氷華は少し後ろめたさを感じたが今更そんな事も言えず、その様子を黙って待ち続けた。典子はバッグの中から目的の物を見つけ出すと、それを開いて意気揚々と話し始めた。

「えーと、人間の顔というものは実は左右対称ではありません。人の顔は左側の方が表情が強調される傾向があつて、相手の素直な感情が知りたければ顔の左側に注目した方が良いでしょう」

「ふーん」氷華は、（知らなくてもどうでも良い情報だな……）と思いつつも相づちを打つ。

「それから相手の嘘を見破りたい時にはその相手の足に注目しましょう。これはね、ほら、ボディランゲージって言うじゃない？ 手

降りとかで意思を伝えようとするやつ。言葉が無しの状態だと顔、手、足の順で相手に思いを伝えられるんだけど嘘のサインが出やすいのは逆で足、手、顔の順になるんだって。嘘つこうって人は感情が出やすい顔とか手は意識しちゃうってるから、足に注目すると良いって先生言ってたよ」

「ふーん……足ねえ」サンドウィッチをかじる、レタスが萎れていて新鮮さの欠片もない。

「それから言葉が短くなったり、手を隠そうとしたり、手で顔に触れたり、それから……」

「ああゝああゝああゝ、もうそれくらいで良いよ。ほら早くせんと昼休みの時間終わっちゃうしさ」

長々と話し始めた典子を遮り、氷華は声をあげた。

「うーん、そうだね」

典子は左腕の時計をちらり見てから手に持ったノートを鞆にしまい、脇に置いたお弁当箱を持ち上げた。

そして氷華がサンドウィッチの最後の一片を口に入れた時だった。氷華の携帯電話が震えながら電子メロディを奏で始めた。（着メロはもちろんどリカム）ディスプレイの表示を見ると実家の番号が表示されていた。氷華は「ごめんな」と典子に断わりをいれてからその場を離れ、典子から十分な距離をとってから電話を取った。

「もしもし……うん、うん、えっ本当に？」

電話の相手は牧からだった。氷華は話を聞いて「すぐ行く」と言っただけで電話を切った。

「誰からだったの？」

典子の元に戻ると首を傾げて尋ねられた。氷華は思わず誤摩化しの嘘を告げる。

「え、ああ友達から。ちょっと緊急の用事で……」

「なにかあったの？」

「たいした事じゃないよ、とりあえずうちもう返るから午後の授業

よろしくな。それじゃ」

氷華は脇に置いたバッグを拾い上げ早々にその場を後にした。背中ごしに典子が呼ぶ声が聞こえていたが気付かない振りをしてそのまま歩み去る。

その背中を見ながら典子は寂しそうな声で呟く。

「嘔吐かれるのって嫌だよね……」

氷華の嘔を、典子はマニュアル通りに見破っていた。

一目見て善良な市民の家宅ではないとわかるたたずまい。氷華の実家は古くからの家並みと振興住宅が混合して同居するこの一帯で一際異彩をはなつて存在している。圧倒的な敷地面積の周囲を、刑務所のごとく高くそびえ立った煉瓦造りの塀が覆い、その上部には鉄条網が張り巡らされている。正門には古城にあるような豪奢で大きな鉄柵。塀や門のいたる所に監視カメラが設置されており、他者の立ち入りを拒んでいる。

中へと入ると牧が出迎えてくれた。玄関口で氷華の姿を認めると背中に手をまわし恭しく頭を下げてきた。

「氷華さん、おかえりなさい」

「ああ、うん……ただ、いま」

言いたくない言葉だった。氷華は自分の実家が嫌いだった。それは幼い頃の事を考えれば当然の事だ。家柄の事で氷華は辛い思いをする事が少なくなかった。だから大学に入ると同時に家を出て、それ以来ここには足を踏み入れなかった。だが「ただいま」と言うところこそが自分の本来の家だと認めてしまうような気がして本当は言いたくなかった。だが「おかえり」と言われたら「ただいま」としか言いようがない。

「それで、さっきの電話だけど詳しく説明してよ」

「こんな所ではなんですから、どうぞ中で」

牧がそう言つてずっと右手を家奥へと向けた。氷華は少し躊躇ったが、牧に従い靴を脱ぎ捨てた。

牧の後を付いてゆくと客室用の居間へと通された。腰を下ろして開口一番に氷華は気になる事を牧に尋ねた。

「今パパはいんの？」

会いたくなかったからだ。実はここに来るまでずっと抱えていた不安であつた。別に恐いとかそんな理由ではない。他人から見れば鬼のように見える存在であるかもしれないが氷華にとっては赤子よりも非力な父親だ。氷華を溺愛しきつていて何でもいう事を聞いてくれるし、何でもしてくれる。扱いやすいかと言われれば扱いやすいとも言えるが面倒臭いともいえる父親なのだった。

「今出かけてますよ」

牧がすぐ側に座り込みながらそう言うのを聞いて氷華はほつと息をつく。

「今日中には帰つて来ないかと思ひます。残念でしたね」

「そうやね。んっでさ、さっきの話の続き早く聞かせてや」

「はい、わかりました」

氷華が尋ねると、牧は顔をしかめて語りだした。口にするのも嫌悪するかのような苦い顔だった。

そして氷華は干川君の居場所と現状を知った。驚きを隠せない。口を挟む事も疑念を抱く事も出来ず、ただ呆然として耳を傾けていた。そして牧の説明を聞き終わり、ようやく氷華は口を開いた。

「つつつまり、女を監禁してた干川君が、今度は逆に……監禁されてるって事!？」

「簡単に要約するとそういう事です。それに至る動機や契機は全くわかりませんし、理解出来るものでもないでしょうけど」

「くっ……典子の奴、よりによつてとんでもない男に惚れたわね……」

氷華は恨めしそくに親指を噛んだ。

「まったくです。それにしても干川という男は本当に何者なんですかね、調べれば調べる程理解不能ですよ」

理解不能、確かにその通りだ。本当になんなのだろうこれは。己が拘束される事も一種のプレイというやつなのだろうか。一歩間違えば典子もこの男に巻き込まれ、蹂躪される事になっていたのかもしれない。そう考えると背筋が凍るような悪寒がしてくる。

典子と干川君を会わせたくなんかない。条件反射でそう思う。だけど典子の恋心を綺麗に終わらせるため、干川君には助力してもらわなければならない。それはもちろん力づくでもという事だ

「牧、それで居場所はわかったんだよね」

尋ねると牧はコクリと首を縦に振った。そんな牧に続けて命令を告げる。牧は「了解です」と言って全て了承してくれた。するべき話を全て終え、氷華は立ち上がった。

「なんかうち疲れたわ、一旦家に帰って寝てくる」

牧が車で送ると言ってくれたが、なんだか一人になりたい気分だったのでそれを断り、氷華は一人実家を跡にした。

ヘソの緒がきゅうつと締め付けられるような感覚。それはジェットコースターの頂きに到着した時の感覚によく似ていた。期待と興奮、それとちよっぴりの恐怖が混じりあったその感覚は非常に快樂的で心地好いものであった。和正の心は遊園地ではしゃぐ子供のように興奮していた。

これからそう遠くない間に間違いなく干川君は死ぬだろう。和正はその身体を看ながら確信していた。

「かはつくふふ……お前もうすぐ死ぬなあ、恐いか、苦しいか？
なあどんな気分だ」

普段饒舌ではない和正であるが、今日の和正はえらく気分が良かった。飛び跳ねて口笛を吹きかねない程に。ようやく和正の望みが叶う。そう思うと笑みがこぼれるのを止められなかった。

「今日はずいぶんと酷い目にあつたなあ、くつくつく……なあなんでお前まだ生きてるんだ？ もうその生を諦めようとは思わないのか？ 死ねよ？ 死んじまえよ。ぐふふふ……」

干川君の横たわる純白のシート。その色はどす黒い赤が染み渡り、もはや赤の占める面積の方がはるかに多い。そしてそのシートの上には牛蒡ごぼうの笹切りのような肉片が幾つも飛び交っている。和正が奈月に与えた新しい玩具。ピーラーによるものだ。奈月はその玩具を嬉々として振り回し、干川君の肉を少しずつ薄く薄く何度も何度も削り取ったのだ。

これまで数々の痛みに耐えてきた干川君であつたが、この痛みと恐怖はかつてない程だったようだ。とても沈黙など保っていられず声にならない阿鼻叫喚を喚き散らしていた。奈月の喜びようもこれまでで一番であり、返り血を浴びながら肉片を徐々に削り取り続ける奈月の表情は、まるで情熱的な薔薇のように妖艶に美しかった。もちろんの事ながら和正はその姿を余す事なくビデオで撮影したの

だった。

干川君はぴくりとも動かず疲弊仕切った様子で天を仰いでいた。その瞳は開いているが意識があるのかは疑わしい。そんなかつての親友に、和正は追い撃ちをかけるように囁きかける。

「なあ死ねよ、死んじまえよ、今すぐ呆気なく、意味なく、なんの価値もなく死んじまえよ、なんで生きてんだよ、死ぬよ！　死ぬ！　死ぬ！　死ねよ！　死ね！」

まるで壊れたスピーカーのように「死ぬ」の言葉を繰り返す和正。その顔は悪魔さながらに醜く歪んでいた。

「……死にたく、ない……ッ！」

「ああ！？」

「死にたくないよ……！」

和正のこめかみがピクピクと脈打つ。沸々と沸き起こる激情。噴火寸前の火山を思わせるほど眼光が鋭くなる。

「死にたくない……死ぬのは嫌だ……死ぬのは怖い、死ぬのは辛い……助けてくれ……誰か……たすけ……」

「この野郎ッ！　まだ生きたいだなんて思ってたやがるのか！？」

和正は激情のままに怒声を飛ばす。恨み、呪い、様々な負の感情を乗せてさらに言葉を続ける。

「良いか、お前は死ぬ！　俺が殺す！　これはもう覆らない絶対の事実だ。お前に出来る事はこれまでの人生を悔やみ、後悔する事だけだ。死にたくない？　今更都合の良い事言ってんじゃねえよ！

お前がこれまででした事考えろ！　死ぬ！　死ぬ！　死ね！　死んじまえ！」

「嫌だ……嫌だ、死にたくなかない、死にたくない……」

干川君の目尻から涙がつうつと流れて落ちた。その姿を、和正は憤怒の表情のままに無言で見つめていた。呆然と涙する様はとても哀れな姿であったが、和正にはそれを哀れむ感情はとうに消え失せていた。

その時、ガタンッ！　という荒々しい音が部屋の中に響き渡った。

「……！？ なっ！？」

和正はたじろいで視線を音の方向へと向ける。閉ざされた一室の扉が強引に開かれ、そこから四、五人の男達が勢いよく飛び込んできていた。

「なんだ、おまえたち……！　ぐつくそ離せ！？」

頑強な体軀をした男達だった。皆一様に真つ黒なスーツと恐ろしいオーラを身に纏っていた。和正は口を開いたと同時に押さえつけられ、いつのまにか背中から羽交い締めにされており抵抗する事が出来なくなっていた。

「げばえ……ぜえぜえ……　なっなんなんだ、お前らは！？　ぜえ……　どうどうやって中に！？」

いつのまにか殴られていた腹の痛みには吐き気を覚えながらも和正は雄叫びに近い狂声を荒げた。

その集団から少し遅れて、若い女が部屋の中へと入ってきた。いかにも頑強で恐ろしい装いの男達に比べて、その女は実に場違いな感じであった。年も和正達と大差ないだろう。普通の女子大生にしか見えない。だがその瞳を見合わせて、和正はこの女が一番恐ろしいと確信した。理由はわからない、だが和正の体は目を合わせた途端に、まるで蛇睨みにあつたカエルのように震えだしたのだ。その瞳はどこか奈月に似ているような気がした。

女は部屋の中央で足を止めると、視線を左右に巡らせて部屋の中を観察していた。そして和正、干川君、そして奈月の姿を確認してから、側に仕えている男に命令を下した。やはり直感通り、この女がその場の力を掌握しているようだ。

男の一人がその女の指示通りに奈月に近づいて行った。その手にはロープ、それと人間一人くらいなら余裕で収納出来そうな黒い袋。「ふえ？　なに、なに……？　ほえ？」

男はまるで物を扱うかのように奈月の腕を掴みあげ淡々と結び目を作ってゆく。

「やっ辞めろ！　奈月に触るな！　触るなあゝ！　……くっそ、ぶ

「つ殺すぞこの野郎！」

前のめりになりながら奈月に近寄ろうとする和正だが、抑えつけられた両腕はがちり組まれていて動けない。肩の間接が外れそう
だ。

女がちらり和正に視線を流して言った。

「そいつうるさいわ。黙らせて」

「はい」

背後からドスの利いた低い声が聞こえたと思ったら、口元にハンカチのような布をあてつけられた。薬品の臭いがする。この臭いは嗅いだ事がある。干川君に何度か使用した事があるからだ。麻酔の臭いだ。手足をジタバタとさせて抵抗するが、その抵抗はむなしく和正の体は突然にしてグツタリと崩れ落ちた。

「さてと、こんにちは干川君」

「……………」

干川君は呆気にとられた表情でその女を見上げ、そしてその顔を
確認して希望をのせた声をあげた。

「あっ…………君は確か典子の？ たっ助けに来てくれたのか！？」

…………多分違うわ」

「えっ、むぐぐつつう…………なっ何を！？」

和正同様に薬品をしみ込ませた布地を口にあてられ、干川君はこ
れまた同様に気絶した。

「さあ、行くわよ」

女が指示を出すと黒スーツ達はなんとも手際よく動き、五分もせ
ずに気絶させた三人を部屋から連れ出し終わった。

こうして奈月の為だけに存在していた一室は崩壊した。

この市街地の中心を、まるで嫌がらせのように占拠する氷華の実

家。その面積はざつと三千？（マンションが建てられる程の面積）はあるだろう。高い外壁の内側には高級旅館のような和造りの住居そして競技場が造れそうなくらい広大な庭がある。松や桜、その他諸々の緑園は完璧に手入れが行き届いて、おまけに庭池まで存在する。

氷華は生まれてからの十八年をここで過ごしてきた。広すぎる氷華の家屋、そのため実家とはいえ氷華も知らぬ入った事のない部屋も少なくない。ここもそのひとつ。そもそも氷華はこの家に地下室があるなんて知らなかった。

剥き出しのコンクリートで出来た階段は、一歩足を踏み出す度に冷たい音を響かせる。地下だからだろうか、それとも一面がコンクリートで覆われているからだろうか。外に比べて二、三度ほど温度が下がった気がする。おまけに少しばかり妙な臭いがする気がした。カビ臭いような血生臭いような妙な臭い。おそらくは気のせいだろう。氷華はそう思ったが自然と口呼吸へとなっていた。

「氷華さん、ここです」

先導する牧に促され視線を右方に向ける。そこには和正と奈月の姿が。

「……ここまでせんでも良かったんじゃない？」

「いえ、氷華さんにもしもの事があつたら大変ですから。こいつらは異常過ぎます」

和正達は、もう牢屋としか言いようがない場所に閉じ込められていた。その造りは無駄に豪華であった。氷華の父親の趣向だろうか。その正面には鉄格子ではなく檜を十字に組み合わせた格子しるものとなっている。まるで時代劇にでも出てきそうな代物であった。

氷華はそれに触れてぼつり呟く。緊張をほぐしたかったのだ。

「こんなものに使うくらいなら檜風呂でも造りや良いのにな」

「ははっ親父さんは凝り性ですからね」

意識的に笑顔を作って笑ってみると少しだけ心に余裕が生まれた。すつと息を吸い込む。やはり少し妙な匂いがする。だが決意を固め

る深呼吸には十分だ。そして氷華は牧に「じゃあ頼む」と伝えた。これは無駄な行為なのかもしれない。けどなぜあんな異常な行動をとっていたのか、氷華はどうしても知りたかった。おそらく聞いても気分の良い話でないはずだ。当然ながらそう思う。むしろ吐き気がするような理解不能な価値観を聞かされる事になるだろう。だがそれでも知りたかった。このまま何もわからないままでは、恐くて堪らない。消化の出来ないお化けを腹の中で飼っているようなものだ。そんな状態でいるくらいならお化けの正体を見定め把握して、そして綺麗に消化して丸ごとすっかり忘れたい。氷華はそう考えていた。

そして和正が目を覚ました。腹ばいに倒れた状態から頭をあげ、そのまま蛇が脱皮をするかのようにずるずると尻を後方にずらし、右手で頭を支えながら頼りなく上体を起こし始めた。そして崩れた正座のような姿勢で頼りなく周囲に視線を巡らせる。その動作は非常に緩慢だ。おそらく薬の作用が未だ続いているのだろう。何度か視線が合いそうになったがその瞳はまどろんでいて景色を捉えていないようだ。

少しの間その様子をうかがっていると、突然その瞳がカツと見開かれた。そして和正がうわ言のように口を開いた。

「奈月……。 奈月！ 奈月……。！？」

我が子を失った親猫のように取り乱した和正が悲鳴のような声をあげる。その表情は必死そのもので余裕のかけらもみられない。氷華達にも気づいていないようだ。

「奈月、奈月、奈月いー！ どこだ、どこにいるんだ！？ うあああー！」

「ちょ、ちよつと落ちつきいよ」

氷華が若干引きながら語りかけるもその声は届いていないようだ。狂気じみた執念が感じられる。

「……その、奈月って子ならそっちにいるから安心してってば」

氷華が指差して奈月の居場所を教えると、和正は過敏に反応し視線を首ごと動かした。そして一流のスプリンターのようなスタートダッシュで奈月に近寄ろうとするが。

「ふが！……ッ！？　ぐっぐああ！」

スタートと同時にすっころんだ和正は顔面を地面に強打させた。

「ごめんな、念の為縛らせてもらったわ」

和正と奈月が入れたのは同じ格子の中。だが二人が居るのは左右の両端。距離にして五メートル程。そして和正の片腕には手錠がつけられており、そこから繋がる鎖は側壁に直接取りつけられている。

「ぐああ！　奈月、奈月、奈月いゝ！」

和正は手錠など知った事が、といった様子で奇声をあげ奈月に近寄ろうと必死だ。手首の肌が破け出血し始めているというのに、その前進を止めようとはしない。

「もう止めとき、それそんなちやなもと違う。どんなに力いれても絶対とれんから」

氷華は子供を宥めるように、言い聞かせるように声をかける。だがその言葉は和正に届いているだろうが理解はされていないようだ。和正はいまだに手錠を強く引き続けている。

牧が氷華の肩に手を置いた。そして「落ち着くのを少し待ちましょう」と言った。確かに和正の様子を見るに、とても話など出来るような状態ではない。例え落ち着いたとしてもまともな話が出るのかは疑問ではあったが、氷華もそれに賛成し少しの時間、その様子を見守り待つ事にした。

やがて和正は力尽きたのか、はあはあと息を荒立ててその場に崩れ落ちた。その瞳は己の手首を忌々しげに睨みつけていた。その夕イミングを見計らって氷華は声を投げかける。

「落ち着いた？　あの子には何も手出ししてへんから安心し……あ……っ？」

背中から冷水をぶっかけられたかのように、氷華の全身を鳥肌が

走った。とりあえず氷華はこう言うしかない。

「あつあんた、なにやってんの!？」

この和正という男、ことごとく氷華の予想の斜め上をいく男である。それも絶頂に気持ちの悪い方向に。

和正は大きく口を開けたかと思ったら、その鋭い歯列を使って、事なく己の親指に噛み付いたのだ。まるで鳥の手羽先に噛み付くかのような躊躇いの無さ、己が傷つく事など全く意に介していないようだ。最初の噛み付きで、既に骨が砕ける音がしていた。人間の咬合力（噛む力）は成人で数十キログラム。奥歯の力であれば四五、七十程度あるが前歯にはそれほどの力、骨を一撃で破壊する程の力は存在しない。通常であれば。

そして何度も親指を噛み続け、和正はようやく親指を引き千切る事に成功した。口に加えた親指を、まるで痰を吐くかのような興味の無さで吐き出すと、和正は手錠を外そうと躍起になっていた。

その時になつてようやく氷華は、和正がなにをしたかったのかに気付いた。考えてみれば当然の事であるが手錠を外したかったのだ。だがその行動にはあまりにも躊躇いが無さ過ぎる。まるで窮死に立たされた兵士のような必死な様、なにが和正をここまでさせるのか。氷華には理解らない。

「氷華さん、もう辞めましょう。これ以上こんな狂人達に付き合っても良い事なんか一つありませんよ」

牧が本当に心配している様子で氷華の手を取った。

「うん、でも……」

氷華が呆けてその場に立ち止まっているとガシャンという金属音が地下室に響いた。和正が手錠を投げ捨てた音だった。負傷したその手を気にする素振りさえ見せずに、一直線で奈月に走りやる。その手を心臓の上に押しあて鼓動を確認し、さらに身体の隅々までを確認する。そして奈月の安否を知った和正はほっと胸をなでおろした。張りつめていた表情から安堵に満ちた微笑みに変わっていた。

「……で、お前らはなんなんだ？」

和正が静かに声をあげた。間違いなく氷華達に向けた言葉だった。あまりにも突然に、そして意外にも冷静な問答に氷華は思わずビクツと全身を萎縮させた。

「えっと、……うっうちの名前は水鏡　氷華、こっちは牧。でもその前にあんたその手はやく手当しないと、すごい出血やないか……。牧、なんかある？」

牧は頷くと地下室のさらに奥へと進んでいった。なんでも奥の物置に常備の救急セットがあるらしい。ガサゴソと物をあさる音をさせると、やがて準備を整えた牧が戻ってきた。

「ほら、こっち来い、手当てしてやる」

格子の前にしゃがみ込んだ牧は嫌悪の表情を隠す事なく刺々しく言葉を投げかけた。

「いい、自分で出来る、道具だけくれ」

和正は素っ気なくそう言った。牧は眉をひそめてその顔を見返すが、特に断る理由もなくその言葉に従った。

氷華は先ほどよりも何倍もの畏怖を和正に対して感じていた。これくらいなら奇声を荒げて暴れていた先ほどの方がまだマシだとさえ思うほどに。この男——和正は冷静だ。頭がおかしい人種なのだと思っていた。何を考えているのかわからない、獣のように欲望に支配された愚か者の一人だと思っていた。けど違う。この男は考えて行動している。先ほどの親指を喰い千切るという行動も、最初はトチ狂ったのかと思っただがそうではないのだろう。己の親指と、あの女の子に一刻も早く歩み寄る事、その二つを冷静に計算して親指を捨てたのだ。取捨選択の基準がおかし過ぎるがそれがこの男の価値観なのだろう。その冷静な様子がなにより恐ろしかった。

傷の手当が終わると、和正は辺りをきょろきょろと見回して氷華に尋ねた。

「千川君はどこだ」

攻撃的な視線だった。この男、ころころとその表情を変化させる。氷華はゴクリと生唾を飲み込んで心を落ち着かせた。

「干川君は、うちが預からせてもらったわ」

「……！？ まさか、お前はあいつを助けに来たのか？」

今にも噛み付いてきそうな狂犬のような表情に変わる。

「お前は知ってるのか！？ あいつがどんな奴なのかって事を、助ける価値なんかあいつには無いんだぞ！」

和正が吠える、氷華はそれを受け流すかのように静かに答えた。

「知ってる、あの男がどんな鬼畜なのかは良くわかってる」

「だ、だったらなんで！　なんで助ける？　まさか人を殺すのが良くないとか偽善を振りかざす気か」

「……別に救うつもりなんかあらへん。うちの目的に必要なだから捕まえただけ。助ける気なんかこれっぽっちもないんやから」

「目的？　なんなんだ、お前達は。なんで俺の邪魔をした」

「質問するのはこっち。あんたは何者？　あの部屋で何をしていたの？」

「そつそんな事はお前に関係ないだろ、そもそもお前こそ何者だ。目的って……」

「牧、頼むわ」その言葉を遮って氷華は名前を呼び、視線で合図を送った。

「ふう、了解です」

牧は懐へと腕を突っ込むと、黒光りする拳銃を取り出し和正へと傾けた。そして和正の動きが止まった。

「まあ今更これを偽物だとか疑う程ばかりじゃないようやね。じゃあ語ってもらおうか、きちんと話せたら解放する事を約束するわ。だから語れや」

和正は少しの間逡巡と悩んでいるようだったが、やがて諦めたのかそれとも従った方が賢明だと思ったのか呟くように口を開き始めた。

物心がつくよりも早くから。和正と奈月は同じ時を過ごしてきた。平凡な郊外型マンション。二人の家族は隣通しの住まいで親を含めて仲が良く、小さな頃から二人で遊ぶ事が多かった。いわゆる幼なじみ、というやつだ。奈月は和正の二つ年下で『二人はまるで兄弟みたいね』と母親が言っていたのを覚えている。お互いに兄弟が居ない一人っ子同士であった事もあり、和正自身も本当の妹のように奈月を大切に想っていた。和正は幼い頃から奈月の事が大好きで、その想いは成長を遂げて変わらぬ事は無かった。それはあまりにも自然な成り行きであった。恋というよりの愛に近い感情をお互いに持ち合わせながら、二人は普通の恋人達と同じように幸せな交際を続けていた。

あの日の事を考えると、何度悔やんでも悔やみきれない。もしも時間旅行が叶うのであれば間違いなくこの過去を消し去りにいく事だろう。奈月と干川君を引き合わせたあの時の自分を。

和正は大学二年生でそれなりのキャンパスライフを謳歌していた。サークルやゼミ活動、高校時代とは自由度がまるで異なる学園生活は非常に楽しいものであった。そんな中、和正には誰よりの仲の良くなった親友が出来た。それが干川君だ。

あの日、和正は奈月にせがまれて大学へと奈月を連れてやってきた。奈月は来年同じ大学を受験する予定だったのだ。『来年は同じ大学に通えるね』とふわり微笑む奈月。そんな奈月にニヤけながら構内の案内をして、そして奈月と干川君を引き合わせたのだ。

「なあ、お前らも干川君の嗜好……知ったんだろ？」

和正は俯いた顔をあげる事なく氷華達に言葉を投げかけた。

干川君の嗜好、気に入った女を監禁しその自由を奪うというどこ

までも利己的で理不尽な愛。氷華は短い肯定の言葉を発して頷いた。
「俺はこいつ、奈月とは恋人同士だったんだ。それをぶちこわしたのが、あいつだ……ッ」

その声は震え、嗚咽するかのように掠れていた。

「俺は突然姿を消した奈月を必死で探したよ、そりやもう必死になつてな。警察にも届けた。奈月が行きそうな場所の全てをかけずり回ったりもした。……だけど見つからなかった。今思えば見つかるはずはなかったんだ」

和正は自嘲気味に口端を吊り上げた。

「それから一月程経った頃、奈月から電話があつた。そして干川君のマンションへ行ったんだ。そこで見た光景には目を疑ったよ。頭がおかしくなったかと思つた」

氷華はあのマンションに行った時の事を思い出していた。干川君宅に放置された四肢の欠けた女の屍体。あれがもし氷華の知り合い、例えば典子だったとしたら。氷華には想像する事しか出来ない事ではあるが、そう考えると狂気に走ったこの男の感情も理解できない事もない。

「だから、復讐したって事が……」

「……ッ！ 違う！ 復讐なんかじゃない！ 俺はそんなつもりじゃない！」

得心してポツリ呟いた氷華の言葉に、和正は過剰に噛み付いた。

怒り、とは少し違うように見える。

「違うって……なにが違う言うの、復讐じゃなかったらなんの為にあない事してたって言うのよ」

干川君の身体は見るも無惨な目に遭つていた。その両足は被害にあつた女達と同じく断たれており、全身に爪傷、切傷、噛み傷、他にも理解出来ない傷跡などを負っていた。その左手など全指が千切られ、かさぶたではなく膿で固まった肉団子のようになっていた。あんな状態になるまで惨い事をしておきながら今更なにが違つと言うのだろうか、氷華は疑問をそのまま口にした。

「違う、やったのは俺じゃない、奈月だ……」

和正は目線を奈月に落とした。その膝元で眠りこける奈月、その顔はあどけない無邪気な寝顔にしか見えない。とてもそんな事をするような子には見えない。だが、和正が嘘を言っているとも思えない。

「奈月は、奈月は千川君に監禁されて、そして……蹂躪されて狂っちまったんだ」

「狂う？」

「ああ……これは奈月じゃないんだ」

奈月は狂ってしまった。精神分裂。精神に多大なる負荷を受けた者に起こる症例だ。奈月の精神は傷つけられ、自己を守る為に異なる人格を生み出したのだ。今現在、奈月の精神を支配しているのは和正が愛したかつての奈月ではない。全く異なる別人格なのだ。

「なにをされたのかはわからないし知りたくもない、だけどおそろく死ぬ程辛い目にあっただんだろうな」

和正は辛そうに下唇を噛み締めていた。

「その奈月は千川君を愛しているんだ。そう強要されただろう、そして愛情表現の方法がいたぶる事だったんだ。これも多分千川君の真似なんだろうな」

……なんて酷い……。氷華は思わず目眩を覚えた。この女の子、奈月は肉体を拘束され、両足を奪われ傷つけられ、さらにはその精神まで破壊された。救いようのない話である。だが一つ疑問が残る。「あんたは……あんたはなにがしたかったの？ 全然わからん、そんな別人格が望むままの手助けなんかしてあんたになんの得があるの」

そう目的がわからない。納得がいかにずいぶん責めるような口調で聞いた。すると和正は珍妙な言葉で返事を返してきた。

「呪いを、呪いを解くんだ」

「はあ、呪い？」

「今の奈月は千川君が生み出した人格だ。奈月は千川君の呪いにか

かっているだけなんだ。だからその呪いを解くんだ。

元の奈月を取り戻そうと和正は尽力を注いできた。だがやがてそれは無理なのだと悟った。この干川君が生み出した呪いの産物ともいえる人格は、もうすでに奈月そのものであった。その呪いを解く方法、それを和正は考えた。それは奈月の手によって干川君を死に至らせる事。さらに肉体的ではなく精神的に。肉体の死滅だけでなくその精神まで根絶させる。そうすれば奈月にかかった干川君の呪いのような人格が解けるのではないか。昔の奈月が帰ってくるのではないか。和正はそう妄信していたのだった。

「俺は奈月の為なら、誰より大切な奈月の為ならなんだってやる。なんだってやってみせる。かつての奈月が帰ってくるなら何を犠牲にしたって構わない」

そう言う和正の表情は決意に満ちていて力強いものであった。

突然、和正が額を床にこすりつけた。土下座だ。

「頼むつ、この通りだ！ もう少しで終わらせられるんだ。あと一歩、あとほんの少しすれば、干川君を全て終わるんだ。だから頼む、俺たちに干川君を返してくれ。俺たちには干川君が必要なんだ、頼む」

切羽詰まった本気の嘆願であった。

「ちよちよつと……」

頭あげてよ、そう言葉を繋げようとした時だった。高いソプラノ音、幼い少女のような声が、さらりと流れてきた。

「嘘つき」

奈月の声だった。

「な、奈月、目が覚めたのか、大丈夫か？ ケガはないか？ 痛いところは？」

矢継ぎ早に質問を投げかける和正。過保護なほど心配をするその様子に、ただならぬ愛情が伺える。そして和正は、奈月の手をまるで宝物でも扱うかのように大切に握った。だがその手はすぐに振り放された。

「触らないで、気持ち悪い！」

高い声をさらにかん高くして和正を拒絶する奈月。そして和正から距離を取った奈月は、氷華に向けて視線を飛ばした。

「なんか面倒臭い事になりそうだから寝たフリでもしようと思っただけど、もー我慢出来ない！ いい、あんた、こいつが今まで言っていた事ほとんど嘘だからねっ」

キンキンと脳に響いてくる声だった。頭痛がしてきそうだ。

「ほとんど嘘？」

「そう、こいつと私は確かに幼なじみだったけど、それ以外は全部嘘。ぜーんぶねっ！ こいつと付き合ってた事もないし、好き合った事もないの。あー気持ち悪い、なんでこんな思い込みが出来るのかなー。こいつはね、私のストーカーなの、さっき話してたのは全部こいつの妄想、もーそーなの」

「そっそうなの？」

氷華は和正に視線を移し尋ねた。

「俺が嘘なんか言って何の意味がある？ これは奈月じゃない、別人格なんだ」

「はあ？ ばっかじゃないの？ 別人格？ 何それ、あんた今どんな思い込みになっちゃってんの？ キモーキャハハ」

なんだこれは……氷華の頭はパンク寸前だ。どちらの言う事が正しいのかその判断をつける事ができない。仮に奈月の言う事が正しいとしたら干川君をいたぶっていたのも和正なのだろうか。

「ああ、あれ？ あれは……私がやってたの。えっなんでって……私の性癖よ、別に良いでしょ。干川君と私はね、前に付き合ってたのよ。干川君はSなだけだったけど私は両方いける口だから。……でちよつと我慢が効かなくなっちゃって、そういう感じよ」

奈月は悪びれる様子もなく揚々とそう言った。

「とにかく！ 干川君を返してよ。もう我慢出来ないんだから」

「そっだ、頼む。干川君を返してくれ。俺たちには干川君が必要なんだ！」

二人は必死な形相で嘆願した。しかしそれは氷華にとって出来ない相談だった。

「……千川君は返せない」

「なんでだ！」

「なんでよ！」

和正と奈月は言葉を重ねて同じ言葉を吐き出した。

「うちの大切な人の為には千川君が必要な、全てが終わったらあんたらは解放してあげるから大人しくしてな」

氷華は踵を返し二人に背を向けた。もう全てが面倒臭くなってしまった。

「牧、もう行くで」

そして来た道をそのまま辿ってその場を後にした。背後で動物めいた奇声が響いていたが完全に黙殺し、氷華が振り返る事はなかった。

「千川君はどこ？」

「え……はい？」

「千川君はどこいるのか聞いてん、どこ！？」

迷いない足取りで階段を上る氷華。振り返る事なく尋ねるその背中に、牧は奇妙な感覚を覚えた。なにかがいつもの氷華さんと違う、そんな感覚がした。

「その男でしたら別室で治療させてます、まだ話の出来る状態ではないかと……」

「だから、どこ！？」

声を荒げる氷華。足を止めて半ばほど振り返り、鋭い眼光で牧を睨みつけた。その勢いに気圧され牧は言われるままに問いに答えた。

「は、離れの別室です」

「そうか、わかった」

氷華はそう言うのと再び前を向き歩き出してしまった。

「氷華さん、もしかして今から行くつもりなんですか？」

「……………」

妙な不安に駆られ尋ねる牧。だがその言葉に返事は返って来なかった。牧は確信した。氷華は今精神的に不安定過ぎる。自分がフォロ―しなければ。無言で前を歩く氷華の後に付き添いながら、牧はそんな風に考えていた。

この家には使われていない空き部屋がいくつもある。干川君を匿ったこの部屋もそのひとつだ。庭先に面した渡り廊下を歩き、氷華は観音開きで襖を勢い良く開いた。六畳一間、壁面には掛け軸やら壺といった飾り立てが施してあり、狭いながらも一応は客人用の間だ。その中央に布団が敷かれ、その上に干川君は寝かされていた。

その脇には白衣を身に纏った医者らしき者が座り込んでいて、点滴や医療器具の詰まった鞆を携えていた。

「干川君の状態は？」

開口一番、氷華はその医者に聞いた。白衣の男は驚いたような目付きで氷華を見上げ、この子は誰だ、というような訝しんだ視線を向けていたが、氷華がこの家の実子だと知ると途端に態度を変えた。「いやゝ危ないところでした。私の迅速な手当が無かったら間違いくなく死んでましたよ。いやもう大丈夫、心配はいりませんよ、ええ、はい」

この医者の名前は相沢 晴紀。水鏡家の子飼いの闇医者だ。相沢氏は自分を売り込もうと必死なようで、過剰な程にへりくだってペコペコと頭を下げている。

「そう、じゃあ起こして」

そんな様子に構う事なく、氷華はそう告げた。

「あついや、それはちよつと……。今は麻酔が効いていますから半日は目を醒まさないかと、すいません」

氷華は呟くように小さな声で「そう……」と言葉を漏らすと、干

川君の元へとずいっと歩み寄った。そして顔元に近づくとその頬を右手で力一杯にビンタした。

バチンツという渴いた音が響く。

「氷華さん？ なっなにを……」

牧が呆氣に取られたような声をあげる。突然の行動に面食らう。

相沢氏も同じく呆然としていた。

「あんた、もう帰ってええよ」

氷華がそう言うのと相沢氏は「は、はあ……では」と言ってその場を後にした。従順な男だ。牧も出ていくように言われたが、牧はそれを断った。氷華は洩るような顔を牧に向けたが、出ていく事を強要はされなかった。

そして氷華のビンタが続く。バチンツバチンツと容赦のないその音が何度か響いた後、干川君の顔がピクリと動いた。そしてその瞳が開き氷華を捉らえる。

「お久しぶり、干川君。うちの事覚えてる？」

「うう……うぐ……」

まどろんだ眼で声をあげる干川君。身体が痛むのだろうか、眉を寄せて顔を歪ませている。

「典子の友達の……氷華さん、だったか」

「ええ、そうや、久しぶりやね。まあ別に会いたなかったけどな」

「君が助けてくれたのか、ありがとう」

「……どうかな、助けた事になるのかな」

氷華は意味深な返答を返す。

「えっ？」

干川君の顔には疑問符が浮かんでいた。牧もまた同様で首を傾げる。氷華がどうするつもりなのか、まるでわからない。

「いきなりだけど頼みがあるんよ、典子の事」

氷華は典子が今なにを考え、なにを望んでいるのか、その事情を余す事なく干川君に伝えた。

「典子の為に協力して欲しいねん、今の典子を救えるのは悔しいけどあんただけやから」

氷華は切実に頼み込んだ。だがその頼みに返ってきた答えは予想外なものだった。

「嫌だね」

「そう、それじゃ……って、え？」

まさか断られるとは思っていなかった。氷華はその耳を疑った。

「なんで？　なんでや、別にたいした事やないやないか、典子ときちんとお別れするだけで無理に、別に無理矢理付き合えとか言うてるんじゃないんやで！？　なんでや！」

氷華は攻め立てるように言葉を重ねた。

「俺が用済みになったらお前は俺を殺すんだろ？」

「えっ！　なっ……！　なに言うてんの」

氷華の身体がビクンと反応を示した。凶星だった。そんな氷華の目を見据えて干川君は淡々と言葉を続ける。

「その目だ。さっきまでずっとそんな目をした二人と一緒にだったからわかる」

「~~~~~！！」

氷華は唇を噛み締めて声にならない声で呻いた。

「氷華さん……そうなんですか？」

その様子に黙っていられなくなつた牧が声をあげた。

「……………」

氷華は口を閉ざし、返事はこなかった。その様子から察してしまつた。牧が先程から感じていた妙な違和感。そういう事だったのか。しかしなぜ？　牧には皆目わからない。

誰も言葉を発さなかった。三人が三人とも押し黙り、しばし沈黙の時間が流れた。

「あんた達の事は、和正って男に全部聞いたよ。えらい予想外の事ばかりで驚ろかされたけど、あの男には……なんか共感してもうた

よ」

沈黙を破り、氷華はポツリ言葉を漏らした。

「共感だと？」

千川君が聞き直すかのように疑問を投げる。その言葉に氷華はゆっくり頷き言葉を続ける。

「そう、和正はうちに良く似てるの。和正は本当にあの子の事が大切だったんだろうね。あの子の為になら善悪なんか超越してしまうほどに。その想いが届かないとこまで、うちとそっくりや」

「……？ 突然なんの話になってんだ？」

千川君が疑問を投げかけるが、それは氷華に届いていないようだ。まるで夢遊病のようにどこか遠くを見据え、ぶつぶつと呟きを続けている。

「あんたが憎いよ、憎くて堪らない。うちの居場所をあつさり奪って、そして消えて、なんでうちはその場所に戻れないの？ あんたなんか最初から存在しなければこんな事考えもしなかったのに……ずっとずっと思ってた。典子を泣かせたあんたをぶっ殺してやりたいって。大切な典子を奪ったあんたが憎くて堪らない」

「なっなんなんだよ、お前……」

「今すぐ殺してやりたいよ。でもその前に、典子の為に、やってもらわなきゃならない事がある」

すつと我に帰ったかのように、氷華の瞳に力が戻ってきた。

「牧、千川君を離れに連れてって」

「ええつと……本気ですか？」

「うん、全部うちがやるから。心配しないで」

「くっ……」

牧は言葉を詰まらせた。『離れ』とは、この家にある拷問部屋の事だ。そこにはありとあらゆる器具や薬が整備されている。全部うちがやる、氷華は本気なのだろうか。氷華がこんな事を考えていたなんて、牧は少しもわかっていなかった。氷華にそんな事をやらせたくない。その行動を止めたい。だが牧の口からは「わかりました」

と言う事しか出来ない。そんな自分が情けなかった。だがそれしか出来ないのだ。

牧は干川君の身体を起こし、ずっと肩に腕をまわした。

「おっおい、どこに連れて行く気だ！」

干川君が怯えた声をあげた。怪しい雰囲気を感じ取っているのだろう。ロボットのよう感情をなくし、淡々と干川君を担ぎ氷華の後についてゆく。干川君には予想だに出来ない事だろう。まさかこれまでに以上に酷い仕打ちがこの後待ち受けていようとは。

いつからだろう。こんな気持ちに気づいたのは。氷華が典子を想う気持ち、それは単なる好きではなくもつと特別な好きであった。異性に対する思慕の念、それと同質の感情を典子に対して抱いていた。典子に近寄るとドキドキする。その手に触れたいと思う、抱きしめてその鼓動を全身で感じたいと思う。そのぶるぶるとした唇にキスしたい、その瞳をもつと近くで、もつと近くで……！ 氷華は典子の横顔を食い入るかのように見つめていた。

「氷華ちゃん？」

「ふえ？」

「どうしたの、そんなにじつと見て。私の顔に何かついてる？」

真剣な眼差しで授業に聴き入っていた典子が突然振り返り、氷華は驚き慌てふためく。

「なっなんでもないよ？ ちょ、ちょっとぼつとしてただけだから」
心臓がいつにも増して活発な鼓動を始める。動揺を隠しきれない。典子の視線に気恥ずかしさを感じ、氷華は教卓へと視線を移したのだが。

「授業終わったよ？」

典子が少し呆れた様子でそう言った。教卓の教授は資料の片付けを始め、気の早い生徒達は早々と席を立ち始めていた。

「あ、ああ……そっか」

「氷華ちゃん最近なんか変じゃない？」

典子はそのか細いあごに人差し指を添えて小首を傾げた。そして大きな瞳で氷華の顔を覗き込んでくる。小鳥のような愛らしいその仕草に氷華の鼓動はさらに高鳴る。

「えっ、そっそんな事ないよ？」

「そっかなー？ なんだか最近おかしいよ？」

「あっいや……とつとにかくもう授業終わったんだから帰ろうよ、

あゝ今日も疲れたわゝ」

氷華は話を遮るように大きく伸びをして、席を立ち上がった。

「うゝん」

典子は腑に落ちない、といった様子であったがそれ以上問い詰めてくる事はなかった。

そして教室を出た。先程の授業は四限目で、今日の授業はもう残っていない。後は帰るだけだ。下校に流れる人混みの中を、二人も例に漏れる事なく続いてゆく。

「氷華ちゃん、今日予定ある？ 良かつたらわたしの家に来ないかな？」

横を歩く典子がおずおずといった様子で言った。

「えっ、典子ん宅？」

「うん、最近学校以外で氷華ちゃんと話してないな、って思ってた。典子はなかなか内向的な性格をしている。こういう事かと言うと一人でいるのが好きなタイプで、あまり遊びに誘ってくれる事は多くない。いつも氷華が強引に誘い、それに付き合う、そんな感じが二人の関係だった。だから典子に誘われ氷華は少しびっくり、そして嬉しくてたまらなかった。

「い、行く行く、典子ん宅！ 久しぶりだなゝ」

そう言葉を発してから氷華は思い出したかのように「あつ……」と苦い言葉を漏らした。

「ごめん、今日用事があるんだった。ごめんな、せっかく誘ってくれたんに」

両手を顔の前で合わせて謝ると、典子は「良いよ、良いよ、そんな謝らないで」と笑ってくれた。氷華の好きな笑顔だ。

「それで用事ってなにかあるの？」

「えっと、それは……」

そんな事、とても典子に伝えられるような事では無い。氷華が自宅でやっている事、そんな事典子には絶対に教えられない。でもこ

れは典子の為にやっている事、少し後ろめたい気持ちは確かにあるが、氷華は確信をもってそう思っている。典子の為だ、と。

「別にたいした事じゃないよ、ちよつとした事だから」

「そう？ …… 氷華ちゃんやっぱり最近変だよ、最近いつもそんな感じではぐらかす。なにかあつたんじゃないの？」

いつもであれば、典子は詮索する事なくただ頷くだけなのであるが今日は違っていた。確かに最近の氷華は学校帰りは毎日実家へと寄っていて、典子と帰り道を一緒にする事もなくなっていた。妙に思われても無理ない事かもしれない。

「なんでもなくて、そんな心配そうな顔すなや」

そう言つて典子の頭に手をのせた。柔らかくサラサラとした髪をそつと撫でてみる。気持ちが抑えられなくなりそうだ。

「……？」

いつまでもそうしてる氷華に疑問に思つたのか、典子が不思議そうな顔で見上げてくる。はつとしてその手をおろす。

「とにかく、今日はごめん。また誘つてよ、それじゃ」

二人はすでに校門へと来ていた。氷華はそう言つて典子と反対方向、実家へと向かう方向へと向かつて走つて行つた。

まさか典子がおのれを尾行してくるなんて事は、氷華には予想さえ出来なかった。

絶対におかしい……

普段から真面目とは言い難い氷華ちゃんではあるけれど、最近の様子は絶対におかしい。授業中とはかく休み時間であつてもぼんやりとしていて、その顔も少しやつれた気がする。

なにか隠し事をしている。それはもう間違いないと典子は考えていた。嘘を吐かれている、そう感じる事も最近が増えた。氷華ちゃん自分が判断して、きちんと考えてそうしているのだからとは思ひ深く詮索はしてこなかった。ただとあまり気分が良いものでは

ない。なぜ相談してくれないのだろう、なぜ嘘を吐くのだろう。もしかして自分に関係のある事情で悩んでいるのだろうか。そう思った時頭に浮かんだのは干川君の事だった。

あの日、氷華ちゃんが慌てた様子で電話をしてきて以来、氷華ちゃんから干川君の話題が出る事は無くなった。もしかしたらなにかわかつているのかもしれない、それをなにかの事情で内緒にしているのかもしれない。

氷華ちゃんの事は信用している。氷華ちゃんが判断して話してくれないのであれば、それを詮索するのはその信用を疑う行為だ。絶対にしてはいけない事だと思う。だけど干川君の手がかりが掴めるかもしれない。そう思ったら居ても立つてもいられなくなった。

……私はなにをしているんだろう、自分の信じている友達を尾行して、疑って、自分自身を恥ずかしく思う。だけど止められなかった。

氷華は京王線駅へと向かって行った。二人が通う大学は最寄りの沿線が二つあり、氷華と典子が普段通学で使うのは、中央線。つまり氷華は家に帰るつもりではないという事がわかる。先ほど言っていた『用事』があるのだろう。典子はその後をこっそりと尾行し続けた。

何駅か電車で揺られて、やがて氷華が駅構内へと降りた。その後を見失わないように典子も後を付いてゆく。とこととこと、と傍から見れば可笑しい怪しい尾行で後を付いてゆく。道行く人に変な目で見られたが氷華に見つかる事はなかった。氷華は一度も振り返る事なく、迷いない足取りで前に進むだけだったからだ。気のせいとその背中には余裕がないかのように思えた。

どこに行くのだろうか、その疑問は駅に降りた際に予想がついていた。氷華の実家だ。典子は中学、高校時代に何度か訪れた事があ

る。氷華は実家があまり好きではないようだったので数回しか訪れた事はないが、この周辺であつたのは間違いない。

とことここ、と親鳥に付いてゆくヒヨコのような足取りで尾行する。やがて大きな屋敷のような建物の前で氷華が足を止めた。典子は十メートル程離れた電信柱に身を隠し、その様子を伺う。なにかインターホンのような物を操作すると中から黒い人が姿を現し、氷華は中へと入っていった。

「あつ……」

声をかけるタイミングを逸してしまった。陰から身を乗り出し、氷華の元へ駆け寄ろうとしたが、既に遅かった。氷華の姿は既に門の向こう側へと消えていて、門も閉まってしまった。

「どう、しよう……」

典子は頭を悩ませた。門の前で立ち止まり、ぐるぐるとその場で二の足を踏む。インターホンを押そうか、そう思ったがなんだか気まずい。古城の鉄柵のような正門、刑務所のそれのように高くそびえた塀、そして監視カメラが幾重にも怪しく光っている。そんな正門を前にして典子は完全に萎縮していた。

しかしここまで来て何もせずに帰る訳にもいかない。勇気を出してインターホンを押そう。そして氷華と話をしなければ、そう思うのだが、なかなか行動に踏み出せず典子はその場で無為に時間を過ごしていた。

すると、突然背後から声をかけられた。

「あの、典子さんですか？」

「は、はやう!？」

驚いて振り向く、するとそこには四十代半ばくらいの男性がいた。顔には皺がよりその頭は禿げあがっている。

「ああ、やつぱりそうだ。お久しぶりです」

その男は深々と頭を下げ、その禿げた頭頂を典子に向けてきた。

「あ……えつと……?」

典子は首を傾げて、思案する。誰だっだろうか、思い出そうと頭

をフルに回転させる。そして思い出した。

「あ、どうも……お久しぶりです」

典子が中学生だった頃、一人で氷華の家を尋ねた事があった。いわゆるアポイント無しでだ。そしてその際にこの男の人に門前払いされて泣かされた事があった。そういえばあの日を境にここに来る事なくなっただけだ。

「氷華さんに御用ですか？」

「え、ああ、はい、約束してないんですけど……」

「そうですか、では」

その禿男は典子が何度も押すのを躊躇していたインターホンを難なく押し付けた。そして何言か話しかけると、正門のロックが外れる音がした。そして門を開くと「どうぞ」と言っただけで典子を促してきただ。

「あの、良いんですか？ 入ってしまった」

典子が上目遣いに尋ねると、禿男はにつこり笑って答えた。

「もちろんですよ、あの日以来典子さんはフリーパスで通せ、って命令されてますね。実はあの時の件で氷華さんにこたえられたんですよ、面目ない話です……。そうだ、改めて謝罪させてください。あの時は大変失礼をしてしまって。本当にすいませんでした」

禿男が再びその頭を下げてきた。

「そんな、やめて下さいよ、全然気にしてませんから」

典子としては申し訳ない気持ちでいっぱいだ。自分の父親と同じくらいの年代の男性に、頭を下げられるなんて気まずいにも程がある。

「本当にすいませんでした、それでは私は失礼致します」

禿男はそう言っただけで頭を下げると、門の外へ出て行ってしまった。どうやらこの屋敷に用事があった訳ではないようだ。わざわざ典子の為に門を開けてくれたのだと分り、典子はますます申し忝ない気持ちになった。今度お礼にお菓子でも作ってもってこようかな、そんな事を考えていた時だった。

「……あれ？」

遠く、遙か遠く——かと言って庭の一番奥なのだが——に氷華の姿が見えた。その後ろには牧の姿もある。

「おい、氷華ちゃん！」

ぶんぶんと手を振り氷華の名を呼ぶ。だがその声は届いていないようだ。遠くに見える氷華はその声に反応する事なく、最奥に見える小屋へと入っていった。

「ああ、行っちゃった……」

ガクツとうなだれその手を下ろす。しょうがないあそこまで行ってみよう、そう思った典子は氷華が入って行った小屋へと向かって歩き出した。

庭先を歩き小屋へと向かう。改めて見てみるとかなりの距離だ。遙か先に見える小屋は手の平くらいに小さく見える。その距離は百メートル以上は裕にあるだろう。それに加えて庭先には大きな庭池があり、それを迂回しなければならなかった為、かなり歩かなければならなかった。

「はあはあ……やっと着いた……」

ようやくたどり着いた時には、もう息も絶え絶えになっていた。その小屋の壁に背中を預け一息つく。

それにしてもこの小屋はなんなのだろうか、物置にしては住居から離れ過ぎている。大きさは四方5メートル程とかなり小さいが、その造りは堅固なものだ。鉄コンクリートで出来た建物は正方形の形をしていて屋根は平たく、まるで学校の体育用具室のようだ。

息を整えた典子は、その扉に手をかけそつと開いた。

「氷華ちゃん……？」

開くと同時にそう名前を呼んでみた。だが中には誰もいなかった。室内は薄暗く、小さな小窓から入るわずかな太陽光だけが辺りを頼りなく照らしている。

「あれ……確かに中に入ってたはずなのに……？」

軽く辺りを見渡す。狭い室内は隠れるスペースもなく、そもそも

氷華が隠れる意味もない。きつと見間違えたんだろう、そう思っ
て出て行こうとした時。

「あつ……」

階段を見つけた。地下室でもあるのだろうか。典子は先程見た氷
華達の事を思い出す。見間違い……そんな事があるだろうか、いや
ない。間違いなく氷華達はこの小屋へと入っていった。それならば
この下にいるのだろうか。

「氷華ちゃん！」

今度は大きな声で呼んでみた。……だか返事は来ない。どうしよ
う……。典子は躊躇した。地下へと続く階段は、薄暗い室内よりも
さらに暗く、なんだか嫌な空気が流れている気がした。だが、ここ
まで来て後戻りする事もどうかと思う。典子は意を決して足を前
に踏み出した。階段は思っていたよりも長く続いていた。これなら
声が届かなかったのも納得がゆく。

「~~~~~!!」

階段を降り終わったその時、氷華の鋭い怒声が聞こえて来て典子
はビクツとその身を縮こませた。

「なつなに、なんなの？」

典子はその場で立ち止まり聞き耳をたてる。間違いない氷華の声
だ。階段を降りた先には細い廊下が続き、その通路にはいくつもの
扉がある。氷華の声はその中の一つから聞こえてくる。なにをして
いるのだろうか。

「あんたも大概しつこいなあ！ いい加減にせえよ！」

こんな氷華の声は聞いた事がなかった。心臓を突き刺すかのよう
な鋭い怒声。氷華の怒りがあらわに伝わってくる。なにをしている
のかはわからない。だが穏やかな状況ではない事は間違いない。氷
華が誰かを……拷問している？

典子は今この場に來た事を激しく後悔した。氷華がなにか隠して
いた？そんな事はわかっていた。なのになぜ隠していたのかまで考
えがいかなかったのか。知られたくない事、それを詮索するなんて

氷華は親友だ。それはなにがあっても変わらない。典子が考えていた事。それは氷華が酷い事をしているという事に対するショックよりも、ただそれを詮索している自分への羞恥だった。

気付かれないように立ちさろう……、そう思い典子はそつと踵を返した。だがそんな典子の耳に信じられない名前が、氷華の口から飛び出してきた。

「いつまで強情はる気や、もうこれ以上は本当に辛いで？ しんどいで？ 死ぬより辛い事って実際あるんやで？ なあ干川君。そろそろ素直になろうや」

氷華の声。まさか……そんな……？

典子の頭に電撃のような衝撃が走る。目の前が真っ白になり、そして無我夢中で目の前の扉に手をかけた。

重く冷たい鉄の扉、典子は身体全体を使い押し込むようにして、その扉を開く。まばゆい光……まるで手術室の蛍光灯のような剥き出しの光が中から差し込む。典子は薄目がちになりながらも扉の向こう側へと視線を飛ばす。

「……なに……これ……？」

「……！？ のっ典子！？ なんで、なんでここに！？」

地下室の小部屋は八畳程の空間。壁面には見た事もないような拷問器具が並べられている。左手側に氷華の姿、その手には黒革の鞭が握られている。その後ろに牧の姿もあつた。そして右手側には干川君の姿が見える。

啞然、忘失、そして驚愕。目の前の真実が信じられない。目の前の真実を受け入れられない。干川君は四五度斜めに立て掛けられた十字形の板の上に、まるでキリストのように？ 付られていた。これまた同じように全裸にされている。その四肢は十字の先で結ばられており——いや足がないので両腕だけ——その全身はミミズ腫れでいっぱいになっていた。

典子は幽霊のようにふらふらと干川君の元へと歩み寄る。その顔は見間違えるはずもなく典子の愛した干川君そのものだった。

「どどいう事……、どどいう事なの！？ 氷華ちゃん！？」
地下室に何度も反響するような大きな悲鳴で典子は叫んだ。

最終章

突然の闖入者——典子——の登場に氷華は完全に虚をつかれ、驚き慌てふためいた。なぜ、なぜ、という言葉が頭の中を巡り混乱し、正常な思考が出来ない。

「どういう事なの！？　なんで、なんでこんな事になってるの！？　氷華ちゃんやったの！？」

敵意を剥き出しにした典子の声、その瞳。氷華は気押されて一歩、二歩と後ずさりしながら「違う、違う……」と首を振る。

「なにが違うのよ！　また嘘じゃない！　干川君、今わたしが助けてあげるからね」

「うう……典子？」

典子は結ばれた干川君の拘束を解こうと躍起になっている。

「待って！　典子、お願い、話を聞いて。お願いだからうちを信じて……！」

「なにを、なにを信じていうの、こんな状況を前にして氷華ちゃんなにを信じていうのよ！」

「落ち着いて典子、全部話すから！　その男は危険なの、危ない奴なの！　実はその男は……」

「きつ危険なのはその女の方だ！　俺の事を無理矢理こんな目に合させたんだ」

干川君が息も絶え絶えに渾身の力を振り絞ったかのような必死な声をあげる。

「あんなく、いい加減にせえよ！」

再び怒りのスイッチが入った氷華は、その手に持った鞭を振りあげた。

「やめて！」

両手を広げて干川君の前に立ち塞がる典子。その瞳は憎しみを帯びて氷華を捉えている。

「酷い、酷すぎるよ！　なんでこんな事するの！？　なんで！？　私への嫌がらせなの！？」

「典子……　ちゃうんよ、そんなつもりやない、これは典子の為なんよ」

氷華は手に持った鞭を滑り落とすと典子に歩み寄り、典子に向かって手を伸ばした。しかし典子の髪に触れる寸前でその手は弾かれてしまった。

「触んないで！　酷いよ、友達だと思ってたのに、大好きだったのに、なんでこんな事するの！？　私が嫌いならそう言えばいいじゃない、干川君は関係ないのに！」

「違う！　違うんよ！　これは典子の為にやってたんよ、その男は本当に危険なの！」

「けっ今更なに言い訳してやがる」

「あんた、ちよつと黙つとれ！　典子聞いて……」

「やめて！　もう氷華ちゃんの事なんかなにも信じられないよ。もう二度と話しかけないで、近寄らないで！」

「そっそんな……　典子、お願い話を聞いてよ……」

「……………」

典子は無言で干川君の拘束を外しにかかった。その背中には、もう氷華とは二度と話さないという意味が伺える。

「ぐっ」

唇を血が滴る程強く噛み締める。悔しい、悔しくて仕方がない。

典子は氷華の言葉よりも干川君の言葉を信じているのだ。典子は氷華の事よりも干川君の事を重要視しているのだ。悔しい、悔しい、悔しい、悔しい！

「典子……」

背を向けている典子の肩にそつと手を置く。典子の手が払いにくるのを、肩をぐつと掴む事によって防ぎ、そして……

「……　きゃあ！」

典子を押し倒し馬乗りになった。典子は氷華の下で必死にもがい

ていた。その手を無理矢理押さえつけ、口づけをする。

「んくうくう！？　ぷはっ、なつなにすんの！」

逃げだそうとする典子の唇を追うようにして再び唇を重ねる。

「んくくうくうくう」

息が続かなくなるまでの長い口づけを終えて、氷華は叫んだ。

「はあはあはあ……なんで、なんでうちを見てくれんの？　なんで典子の目にはうちじゃなくて千川君が写っているの？　嫌だ、嫌だ、嫌だ」

「ぎいやああ……！」

氷華は馬乗りになったまま典子の瞳をえぐり取った。夥しい出血。絶叫する典子。氷華の手上には典子の眼球が転がっている。

「いやああ……！　痛い痛い！　死んじゃうよ……！」

「典子はうちだけを見てれば良いッ！　うちだけを見つめて、うちの事だけ考えてくれれば良いんや！」

「いや……！　痛い痛い！　死んじゃうよ……！」

「ちよっ、氷華さん！　なにしてるんですか！」

もう黙ってられないとばかりに牧が制止に入る。氷華の腕を掴み引き離そうと試みるが、怒声と共に払われる。

「うつさい！　邪魔すなや！」

「氷華さん……！」

氷華は水鏡家、親父さんの一人娘。牧は親父さんから信頼を得ていて、牧と氷華が婚約する事を望んでいる。当初は己の出世の為に氷華と接してきたが今は違う。今は本当に愛してしまった。だからこれまでも氷華の望む事すべてに受け入れ応えてきた。だがこの状況、牧は一体どうすれば良いのかまるでわからなくなってしまった。

そして氷華の狂乱は続く。残る眼球をえぐられた典子が再び身の毛もよだつような絶叫をあげる。氷華はそれを意に介する事もなく取り出した眼球をうつとり愛でる事に夢中になっている。そして付いた血を舌で舐め回す。ペロリと舌を伸ばした氷華の表情は愉悦に

浸りきっている。

「いだいいい！ うああ、いだいよ！」

「ごめんな、典子……」

両の手で持った典子の眼球をそつと脇に置くと、氷華は典子の上着をガバツと左右に裂いた。典子の肌が露あらわになり純白の下着だけとなる。

「ずっとこうしたかった……」

氷華は血にまみれた手でその純白を汚しながら、最後の下着も剥ぎ取った。典子の豊かな胸、憤ましく突起した乳首、その美しさに氷華は心を奪われた。ゴクリと生唾を飲み込む。もう歯止めが効かない。典子の胸を強引に揉みだき、その乳首をつねり、ねじる。天にも登りそうなくらい柔らかく、暖かいその感触に氷華の興奮は絶頂へと至る。

「いイヤ！ やあめてえ！ 痛い！ 本当に痛い！」

氷華は止まらない。自らも服を脱ぎ捨てると典子に身体を合わせ再びキスをした。自分の乳首と典子の乳首が擦れ合い、電撃のような快楽が全身を走る。さらに標的を胸へと移した氷華は、典子の乳房を血が滲む程強く噛み締めた。

「典子！ 典子の身体すつごい気持ち良いよ！ 典子も感じてる？ 気持ち良い？ 気持ち良いよね？」

氷華の手が典子の下半身へと迫っていった。

「イヤ！ ヤダヤダ、もうイヤ！」

もう駄目だ。これ以上黙って見てなどいられない。牧はそう思い拳を強く握り締めた。たとえ氷華の意に背く事になろうとも力づくで氷華を抑えよう。そう思い足を前に踏み出そうとした時だった。再び重い扉が開かれた。ギギギ……と耳障りな音と共に扉が開き、そこから奈月の姿が現れた。

「あゝん、干川君みつけ」

氷華と牧はその場でたじろぎ、その奈月へと視線を奪われる。

「あんた、どうやってここに！？　それは一体……？」

突如現れた奈月、その手には和正が握られていた。その和正には頭と左手しか付いていない。半身どころか身体の八割を失った和正の姿、まるで出来の悪い宇宙人のようだ。その和正の頭を掴み引きずりながら入ってきた奈月が氷華に視線を投げかける。

「あつあんたこないだの女……んうん？　あははっ、あんたもそんな性癖なんだもしかしてお楽しみ中だったかな？」

奈月は品定めするかのような目付きでそう言った。

「ふっふざけんな、あんたと一緒にするんやない！」

氷華は同類だと思われた事に憤りを隠せず、怒声を返しギツと睨みつける。

「……奈月……そんな奴に構ってないで……ゴホッはあはあ……干川君を……！　俺が死ぬ前に早く……！」

和正が口から血を噴き出しながら奈月に語りかける。そんな和正を、まるでゴミでも扱うかのように奈月は放り投げた。

「うるさいな！　私に命令しないで。言われなくてそのつもりなんだから」

そう言つと奈月はそろそろと干川君の元へと歩き出した。

「牧！　止めて！　そいつ抑えこんでまた閉じ込めといて！」

「……………」

氷華の命令、だが牧は微動だにしなかった。その反応にいらつきながらも氷華が再び声をあげる。

「牧、なにしてる、命令や！　抑えつけとけて！」

「……もう辞めましょう」

「牧？」

牧は懷から拳銃を取り出した。そしてパンツパンツと二発の銃弾を打ち出した。それは牧の思いとは裏腹になんとも軽快な音だった。

「うっうっう……うあああ……典子！？」

「いやあああ……！　干川君！？」

氷華と奈月が似たような悲鳴をあげた。

牧の打ち出した弾丸は一発目は典子の頭に、そして二発目は干川君の左胸へと着弾していた。

「典子、典子、典子……！ うわああ……」

「干川君、死んじゃヤダよ……」

二人はもう動かない相手に対して懸命にその名を呼び続ける。

「氷華さん……これから私があなたを支えます。どんな事があっても一生添い遂げます。だから……もう忘れましょう。それが氷華さんの為です」

牧の突然の行動、それには狂おしい程の嫉妬があつた。同性である典子、そんなものに何故自分が負けるのか。これまで氷華の事だけを想い、尽力を捧げどんな望みであろつと叶えてきた自分が、何故あんな小娘に負けなくてはならないのか。牧はそんなどす黒い嫉妬心をずっと胸に抱えていたのだった。

彼らの想いは錯綜し、狂走し、迷走を続ける。当初は純粹で崇高であつたはずの彼らの愛情は、競い合うかの様に狂乱し誰かの為という大義名分を掲げて自らの思うがままにその欲を満たしてゆく。独善的な思考は空回りを続け、己が愛した人を傷つける。まさに狂走、狂走する自慰愛。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0418t/>

狂騒する自慰愛

2011年6月21日21時10分発行